月刊 FALCOM MAGAZINE

Vol.115



伝説の冒険家・
アドル・クリスティンを探せ！
も～っと集まれ！ファルコム学園

メインストーリー更新！
『閃IV』から新キャラも登場！
英雄伝説 暁の軌跡

《結社》の襲撃に
それぞれの立場で立ち向かう王都民たち
英雄伝説 空の軌跡SC ～絆の在り処～

『軌跡』シリーズ始まりの物語を振り返る
英雄伝説 空の軌跡

ファルコムニュース

ついに発売！
それでもまだまだ新情報は止まらない!?

英雄伝説 創の軌跡



FALCOM MAGAZINE

CONTENTS



ついに発売！
『創の軌跡』はまだまだ新情報が止まらない!?

THE LEGEND OF HEROES
創の軌跡
【はじまりのきせき】

ついに発売日を迎えた軌跡シリーズ最新作『創の軌跡』。今作はこれまで以上に新情報が止まらない!?　なんと発売月号となる今回も新キャラクターをはじめ、新情報が続々と到着！　そして、冒険がより楽しくなる恒例のDLC情報も一挙公開！

『英雄伝説 創の軌跡』公式ホームページ
https://www.falcom.co.jp/hajimari/

タイトル：英雄伝説 創の軌跡　**発売日**：好評発売中
ジャンル：ストーリーRPG　**対応機種**：PlayStation®4　**プレイ人数**：1人
小売価格：[通常版] 7,800円（税抜）[Platinum マイスター BOX] 10,800（税抜）
［ダウンロード通常版］7,590円（税込）［デジタルデラックス版］11,000円（税込）
［シーズンパス］4,180円（税込）
CERO レーティング：C

※画面は開発中のものです。



アガット・クロスナー
CV：近藤孝行

「俺が全力で支えてやるさ。——頑張れよ、ティータ」

《重剣》の二つ名を持つリベール出身のA級遊撃士。
大剣を自在に扱うパワーと持ち前の気合で数々の任務を全うしてきた実力者であり、《リベールの異変》解決の功労者の一人でもある。
遊撃士として帝国入りした後は様々な局面でトールズ第Ⅱ分校や新旧《Ⅶ組》と共闘し、災厄《巨イナル黄昏》ではエステルらリベールの仲間たちと協力して危機に立ち向かった。
リベール時代からの付き合いであるティータの成長を深い愛情をもって見守っており、災厄後も遊撃士としての仕事をこなしながらティータの開発研究に協力しているようだが、彼を目の敵にしているティータの母、エリカ博士がやって来たためか個人的な気苦労も増えているという。







ティータ・ラッセル
CV：今野宏美

「この一年間が、みんなと過ごした時間が無駄じゃないって証明したかったから！」

トールズ第Ⅱ分校《Ⅸ組》主計科に所属するリベール王国出身の少女。
《三高弟》として知られる天才導力学者・ラッセル博士の孫娘で、現在はG・シュミット博士の四番弟子として彼に師事している。
普段のあどけなさに反して芯のある性格で、ラッセル家で磨き上げた技術力は堅物のシュミット博士も認める程。
災厄《巨イナル黄昏》では以前から開発していた二足歩行型強化外装「オーバルギアⅢ」を駆って戦列に加わり、技術者としての腕と知識でリィンたち新旧《Ⅶ組》をサポートした。
その後も第Ⅱ分校に留まり、遊撃士アガットの応援を受けながらRF社やエプスタイン財団との次世代「オーバルギア」開発に積極的に取り組んでいる。





G・シュミット博士

CV：大塚芳忠



「政府やギルドの思惑など知ったことか。私はあくまで《工房》が残したデータにしか興味が無い」

導力革命の父、C・エプスタイン博士の直弟子《三高弟》の一人にしてトールズ第Ⅱ分校の特別顧問を務める天才導力学者。
職人気質で気難しく、研究のことを第一に考えているが、ぶっきらぼうな言葉の裏に二番弟子マカロフや三番弟子ジョルジュへの気遣いが見え隠れすることがあり、四番弟子ティータの成長を認めるような気概も持ち合わせている。
"魔煌機兵"など、帝国内戦～災厄《巨イナル黄昏》にかけて《黒の工房》が各地に残した武器、自律型兵器といった後々の禍根となりかねない問題を解決するため、RF社協力の下で《工房》跡地の調査を進めている。



レクター・アランドール

CV：森田成一



「ったく、タヌキオヤジが引退して少しは楽になるかと期待したんだがなぁ」

帝国軍情報局に所属する特務少佐にして、外交書記官としての肩書も持つヤリ手の情報将校。
元《鉄血の子供達（アイアンブリード）》の一人であり、いい加減に見えて裏ではあらゆる方法で交渉を成功させることから《かかし男（スケアクロウ）》とも呼ばれている。
災厄《巨イナル黄昏》ではオズボーン宰相の駒として非情に徹し、勝敗が決した際は自決まで考えていたが、リィン達の説得もあって考えを改め、情報局に留まる形で今後の帝国を支えていくことになった。
天賦の才である"カン"によって、災厄後のゼムリア大陸で何らかの異変が起こる事を察し、再独立を控えたクロスベルへと向かうことになるが……。



ルーファス・アルバレア

CV：平川大輔



「この私が手ずから祓うとしよう。クロスベルの歪みの象徴たる"支援課"という幻想を」

四大名門の一角、アルバレア公爵家の長子にしてギリアス・オズボーンの直属《鉄血の子供達（アイアンブリード）》の元筆頭。
欺瞞に満ちた帝国貴族を見限り、"真の父"と崇めたオズボーンを乗り越えることで「この世に生まれた意味」を見出そうとあらゆる手を尽くして己の力を蓄えていった。
災厄《巨イナル黄昏》では人としての生を捨ててまで勝利を掴もうとするも、リィンたち新旧《Ⅶ組》の前に敗北。
人を信じず、誰にも頼ろうとしなかった自身と人の絆を信じた弟・ユーシスとの違いを悟り、自ら負けを認めた。
その後、オズボーン亡き後は筆頭としてルーファス自身がすべての罪をかぶる形で逮捕されたはずなのだが……。



ディーター・クロイス

CV：竹本英史



「己の"正義"の在り方、今一度ロイド君たちと見つめ直すといい」

元ＩＢＣ（クロスベル国際銀行）総裁にして、古より錬金術を継承してきたクロイス家の末裔。結社《身喰らう蛇》の使徒第三柱・マリアベルの実父にあたる。
自身の"正義"を実現するため、《零の至宝》キーアを利用するなど強引な手法でクロスベルの国家独立を画策し、自ら大統領に就任するといった暴挙に及んだがロイドたち《特務支援課》の活躍により国際的犯罪者として逮捕された。
その後、帝国によるクロスベル占領、災厄《巨イナル黄昏》が引き起こした世界大戦を経験する中、獄中で"正義"の在り方を問い直す日々を送っていたらしい。



発売日から続々配信開始！
冒険がより楽しくなるDLCをチェック！

約２年ぶりのシリーズ最新作の発売に、すでに胸を躍らせながら冒険に旅立っているユーザーも多いはず！しかし、あわせてチェックしておきたいのが毎回恒例のDLCアイテムの数々だ。イメージがガラッと変わる美麗な衣装はもちろんのこと、おなじみの珍（？）アクセサリーは今回も健在！また、この他にも冒険に役立つアイテムセットなども配信されているので、忘れずにチェックしてみよう。

※『英雄伝説 創の軌跡』デジタルデラックス版およびシーズンパスご購入者は発売日以降、PSストアで有料配信される衣装・アタッチアイテムをすべて無料で入手することができます。



好評配信中！

隊士服セット Vol.1 330円



三人の主人公、ロイド、リィン、Cを隊士風のデザイン衣装に変更することができます。

耳飾りセット 165円



ユニークなデザインの耳飾りを装着できるアタッチアイテム。「クイーンズパピヨン」、「バーリー・シェルズ」、「ハイエンド・センサー」の３種セットです。

オリジナル和装 各330円



《特務支援課》のエリィとティオをオリジナルの和風デザイン衣装に変更することができます。

トロピカルフルーツヘッドセット 110円



インパクト抜群の巨大かぶり物でアピール！「バナナヘッド」、「スイカヘッド」、「キウイヘッド」の３種セットです。

エフェクトセット 165円



プレイヤーキャラの周囲に特殊なエフェクトを追加することができます。「桜花乱舞」、「キラキラ」、「宵闇の翼」の３種セットです。

新・自己主張の激しいパネル 165円



プレイヤーキャラの頭の上に、メッセージパネルを表示することができる特殊アイテム（全12種）

のぼり旗セット 165円



シリーズに登場する国、組織等をモチーフにした旗を背面に装着することができます。「リベール」、「トールズ」、「身喰らう蛇」、「クロスベル」、「ミシュラム」の５種セットです。







９月３日配信開始予定

オリジナル水着（スウィン／ナーディア） 各330円（セット550円）



《C》ルートに登場するスウィン、ナーディアをオリジナルデザインの水着に変更することができます。

オリジナル和装（アリサ／アルティナ） 各330円（セット550円）



新旧《Ⅶ組》のアリサとアルティナをオリジナルの和風デザイン衣装に変更することができます。

新・どこでもセット 165円



プレイヤーの周囲にフワフワ浮かぶ、素敵なミニチュアアイテム。旅のお供に。「どこでもクーちゃん」、「どこでもにがトマトマン」、「どこでもメルカバ」の３種セットです。

イヤリングセット 110円



ワンポイントアイテムとしてお洒落なデザインのイヤリングを装着することができます。「スカイフェザー」、「ボム・エレガント」、「花札のピアス」の３種セットです。

ビンテージメガネセット 110円



様々なシチュエーションに使える、シックなデザインの眼鏡を装着することができます。「サーモントフレーム」、「ラウンドゴールド」、「オールドグラス」の３種セットです。

和風かぶり物セット 165円



隊士服や和装と相性抜群の和風かぶり物！「天蓋笠」、「浪人笠」、「鳥追い笠」の３種セットです。

バックパックセット Vol.1 165円



キャラクターの背中に特殊なアイテムを装着できるアタッチアイテム。「フードキャリアー」、「レスキューボンベ」、「ギターバッグ」の３種セットです。

バラエティメガネセット 110円



個性的なデザインの眼鏡を装着することができます。「モノクル」、「ラブ・サンセット」、「LEDサングラス」の３種セットです。

最後に到着したミニゲームは機甲兵戦！ 気になるエピソードもチェック！

かつてないボリュームで紹介してきた『創の軌跡』情報だが、「真・夢幻回廊」で解放されるコンテンツである「ミニゲーム」や「エピソード」の情報も最後まで止まらない！　最後に到着したミニゲームは、『閃の軌跡』シリーズでも慣れ親しんだ機甲兵に搭乗して戦うアクションゲームだ。

ミニゲーム　《プロジェクト・ティルフィング》

起動者と同調（リンク）することで驚異的な性能を発揮する《騎神》――。
その《騎神》の動きを“機甲兵で再現する”という、次世代型機甲兵の開発がマカロフ教官の手によって進められていた。
《騎神》の起動者としての経験と操縦技術を買われたリィンはシュミット博士が開発したという独自のシミュレーターで研究に協力していくことになるのだが……。






エピソード1　《堕ちたる皇子》

結社《身喰らう蛇》の門を叩き、“執行者候補”としての日々を送る“元”皇太子・セドリック。
猟兵団《赤い星座》の実戦訓練で打ちのめされ、無様な姿を晒す彼に優しく手を差し伸べる者などいなかった。
誰かに縋る事は許されない。誰かが守ってくれることもない。
それでも、セドリックはたった一人で進んでいく。人生で初めて、自分の意志で選んだ道なのだから。





エピソード2　《果てなき剣》

先の夏至祭で皇帝ユーゲントⅢ世が戯れに発言した『リベールのような武術大会も面白いかもしれんな』という言葉。
オリヴァルト皇子の提案で実際に大会が開催されることとなり、帝国内外から多数の参加者が集まることとなった。
《剣聖》カシウス、《風の剣聖》アリオス、《光の剣匠》アルゼイド、《黄金の羅刹》オーレリアといった凄まじい顔ぶれの中、リィンと《神速》デュバリィをはじめとする若手の参加者たちは４人１組でトーナメント戦に挑戦することになるが……。





★え？アドル？海岸あたりに転がってない？？★



知っているか

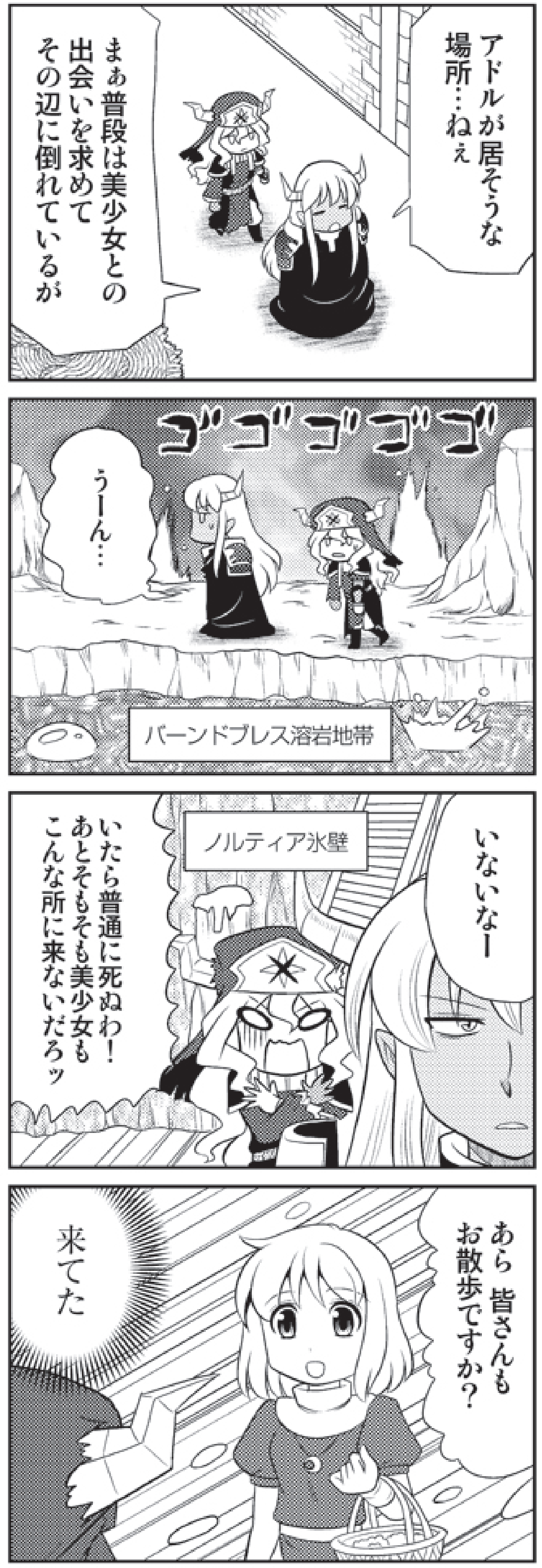


※ドラマCD「イース&空の軌跡vs.ヴァン・ジョー」参照

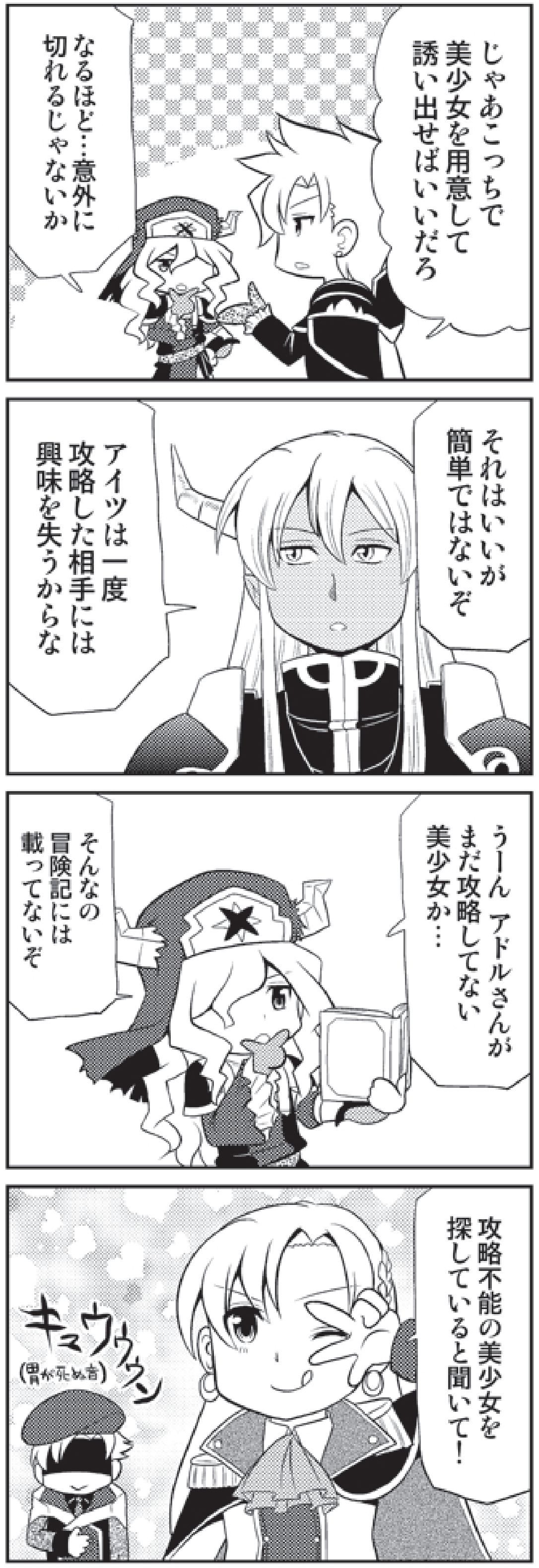
未来の白猫



いそうな場所



美少女を探せ



平凡な美少女



それも赤の王




クリムゾンライン
人違いでした…
それはともかく赤の王が暴れているというのは本当ですか？
ああ…なんでも突然女性に抱きついてくるとか
お姉ちゃーん♡
むぎゅ
唐突に何するんじゃボケェエエエ!!
ごふう!?
ドゴーン
間違いない…あれは赤の王の異能「王者の道(クリムゾンライン)」!!
あわびィィィィ
ただの鼻血では


それは紅の王
ふふ…今のは効いたよお姉ちゃん
あれは…セドリック皇太子!?
いいや 今の僕は紅の魔王「エンドオブヴァーミリオン」!
千のお姉ちゃんを持つ魔人さ!!
END OF VERMILLION
すべての美少女は僕の力で年齢を問わずお姉ちゃんになるのさッ
あはははは
そんなことになったら俺達「世界を妹で満たす会」は破滅だ…！
どっちにしろ君達は破滅しとけ

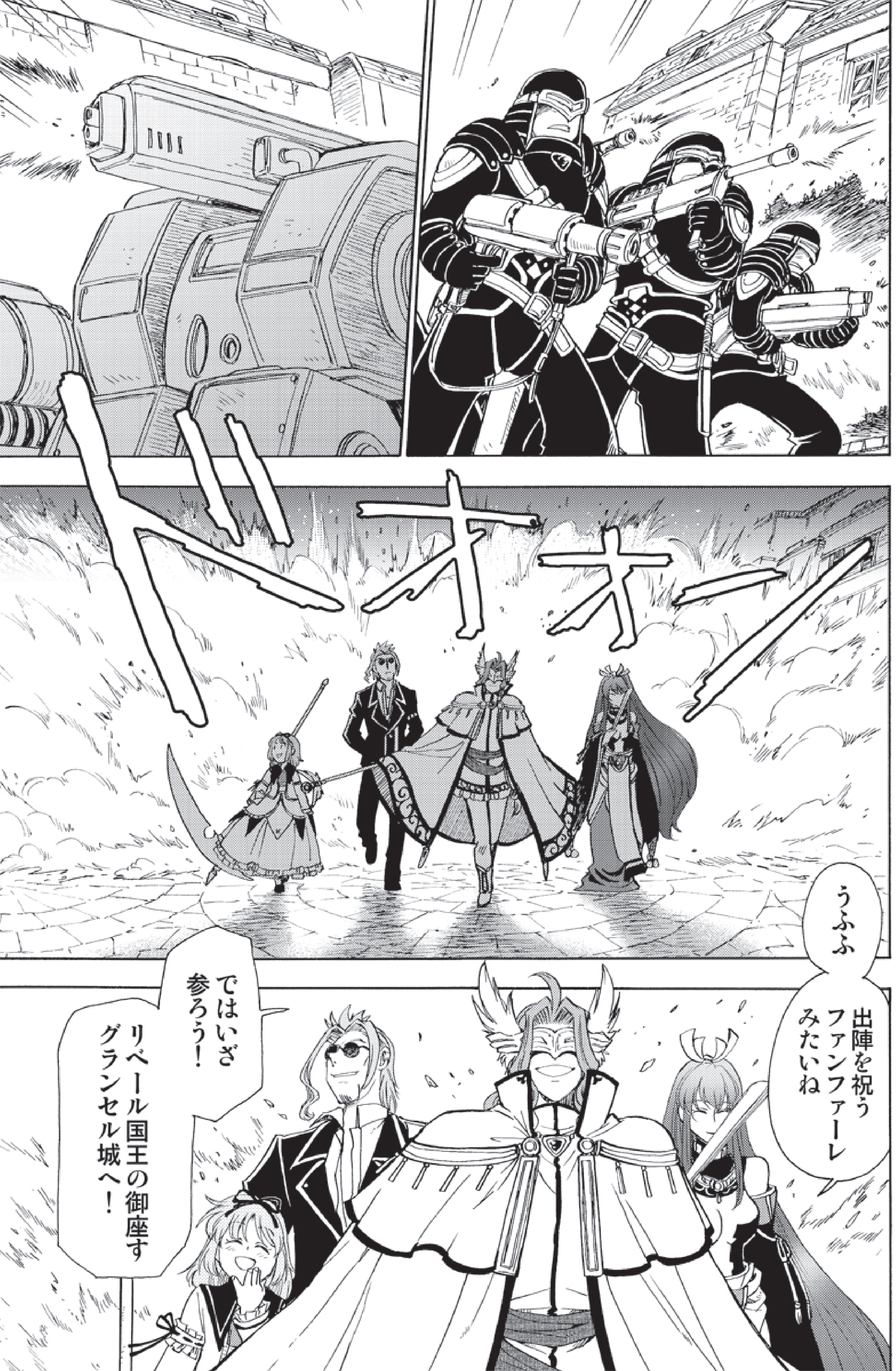

弟のタイプ
むっ…あんな所に美少女の集団が！
END OF
悪いが君達の相手をしているヒマはない！
待ってくださいお姉ちゃーん!!
がばっ
引っかかりましたね殿下
ゲェッ クルト!?
ご安心ください僕は兄のように暴力に訴えるタイプではないので…
ゴゴゴゴゴ
END OF CEDRIC
精神的に折るタイプですね
嫌───ッ!!
てっしゅー!!

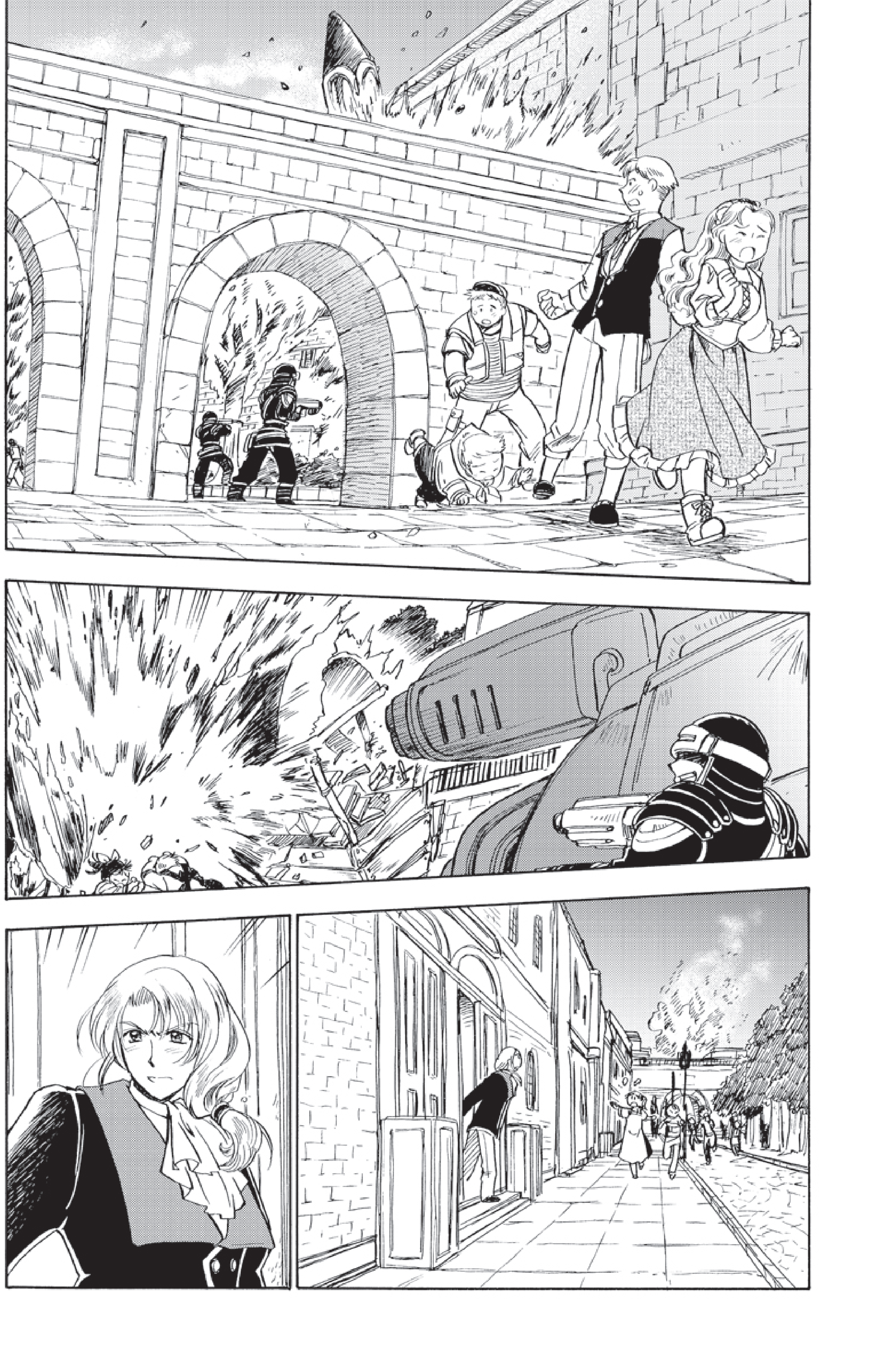

アドルさんってこんな人
アドルさんかぁ 一体どんな人なんだろ
おっそこにいるのはアドルじゃねーか 最近見ないから心配してたぞ！
!?
いやぁちょっと山の向こうまで冒険に行っててさ
HAHAHAHAHA


FB ファルコムBOOKS
これを読むまで
しぬでないぞ!!
『月刊 Falcom magazine』に掲載された読み切りコミック 13 本を完全収録したコミックアンソロジーがついに登場！ 新旧ファンも納得のラインナップで贈る、ファルコム愛溢れる1冊を是非ご堪能あれ！カバーは『英雄伝説空の軌跡』コミカライズを担当した啄木鳥しんき先生の豪華描き下ろし♪
好評発売中!!
収録テーマ作品
『イース』
『ブランディッシュ』
『ヴァンテージマスター』
『ぐるみん』
『ザナドゥネクスト』
『軌跡シリーズ』
ふぁるこむコミックざんまい
価格:本体920円+税
ISBN 978-4-89610-818-7
©Nihon Falcom Corp. All right reserved.
発行:フィールドワイ
発売:メディアパル
フィールドワイのHPはこちら
www.field-y.co.jp


異世界《ザナドゥ》に勇者よ再び！
も〜っと集まれ！
ファルコム学園
①
著者:新久保だいすけ
定価:本体900円+税
学園生活を満喫していたが、全員が元の世界に戻っていった英雄・戦士達。しかし、再び彼らは伝説の桃源郷《ザナドゥ》へと帰ってきた！ 果たしてその理由とは!?
奇才・新久保だいすけが贈る、お待ちかねのシーズンⅡ、リスタート！
ISBN:978-4-8021-3138-4
©Nihon Falcom Corp. All rights reserved.
©DAISUKE ARAKUBO
©2019 FIELD-Y
FB ファルコムBOOKS
発行:フィールドワイ
発売:メディアパル
フィールドワイ公式HPはこちら www.field-y.co.jp
ファルコムブックス公式HPはこちら www.field-y.co.jp/falcombooks


それから
諸君は
グランセル市街を制圧せよ！
空の軌跡SC
～絆の在り処～
漫画 啄木鳥しんき
原作 日本ファルコム


うふふ
出陣を祝うファンファーレみたいね
ではいざ参ろう！
リベール国王の御座すグランセル城へ！

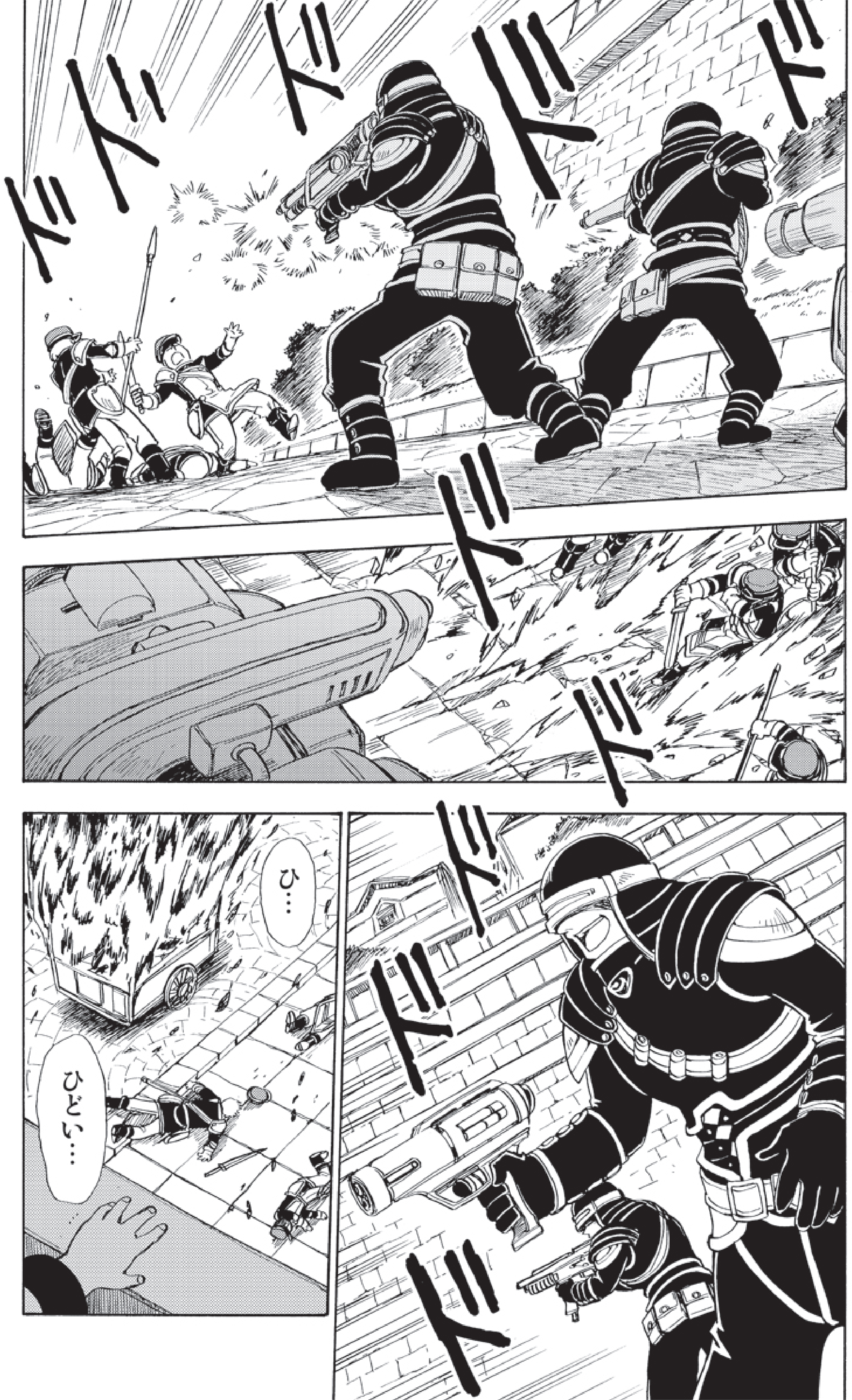



あんですって——っ!
結社が王都に現れたですって!?
予測はしていたけど
本当に行動を起こしてくるなんて
了解した!
では手筈どおりに!!


お祖母様！
リベール上空に飛行船が…
あの機体は…おそらく結社の船です！
早く対策を打たないと…
わかりました
よろしくお願いします
はい!!

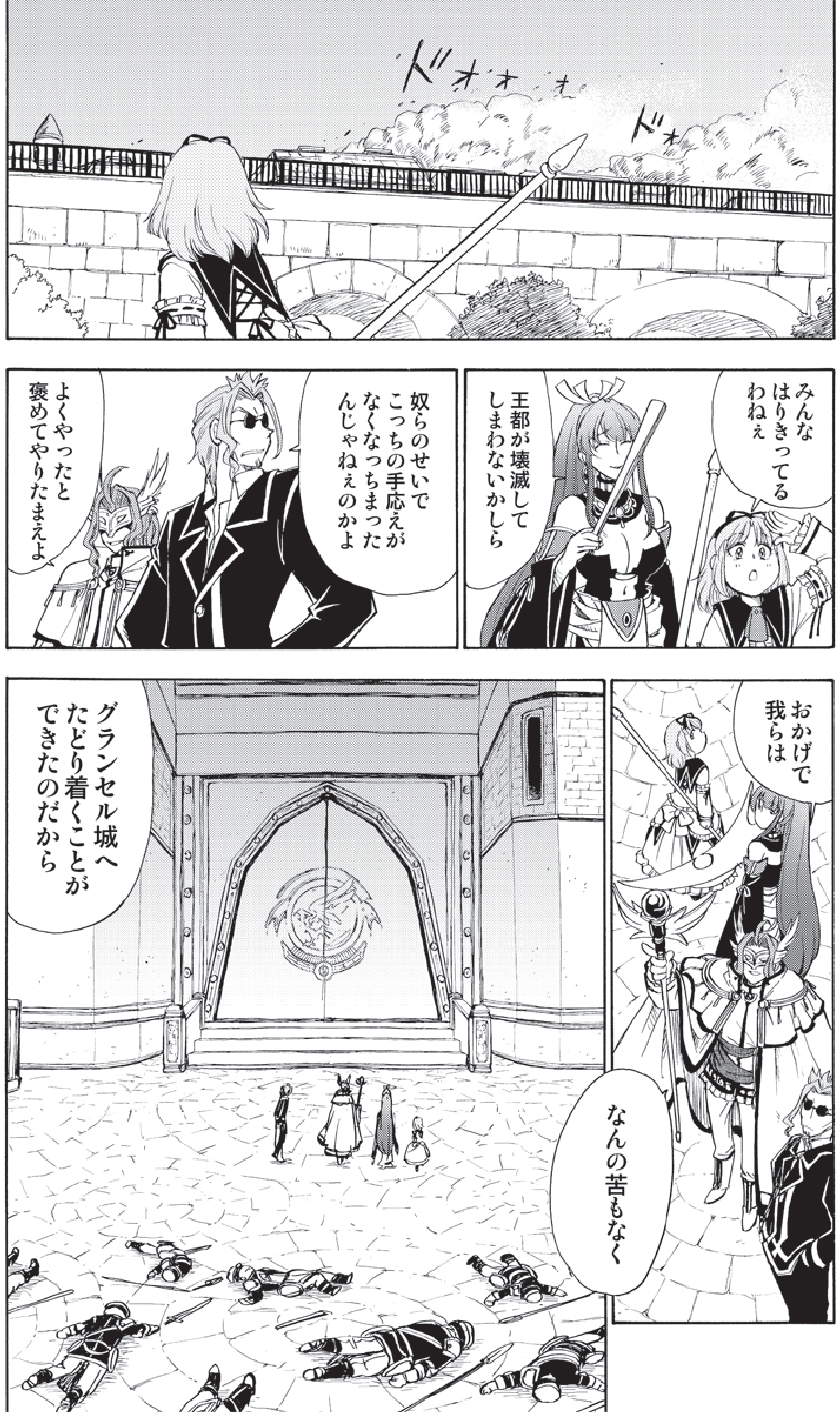

クローディア
結社の一団が王都に現れました
市民を守る対策は軍に打診をしています
彼らを信じて任せておいて大丈夫です
ただ執行者を名乗る者たちがこちらに向かっているとのこと
城門が破られることはないと思いますが
万一に備えておきましょう
王が落ちれば
国は滅びます
…貴女も心してかかりなさい



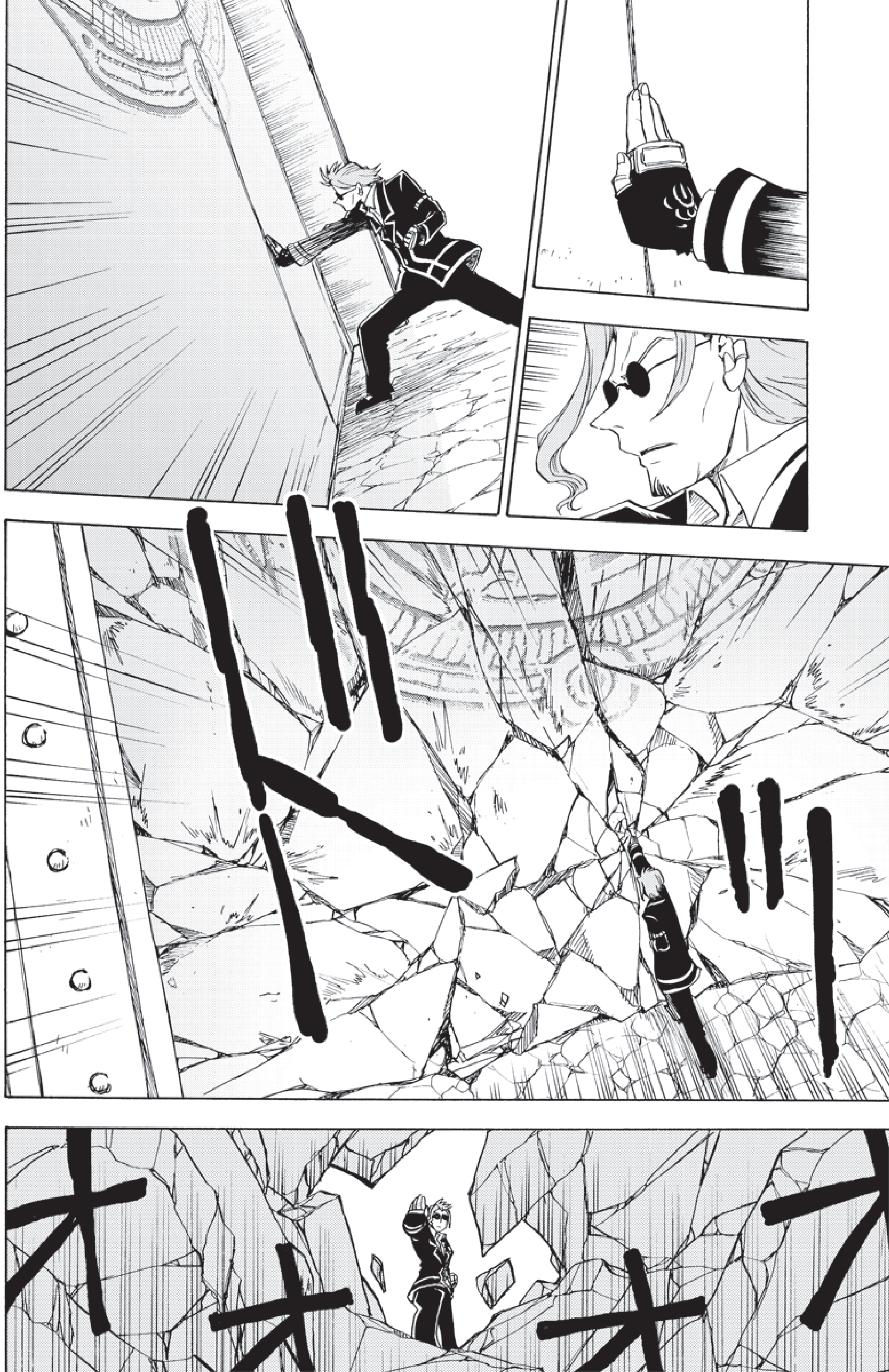

ドドドドドド
ドドドドド
ひ…
ひどい…

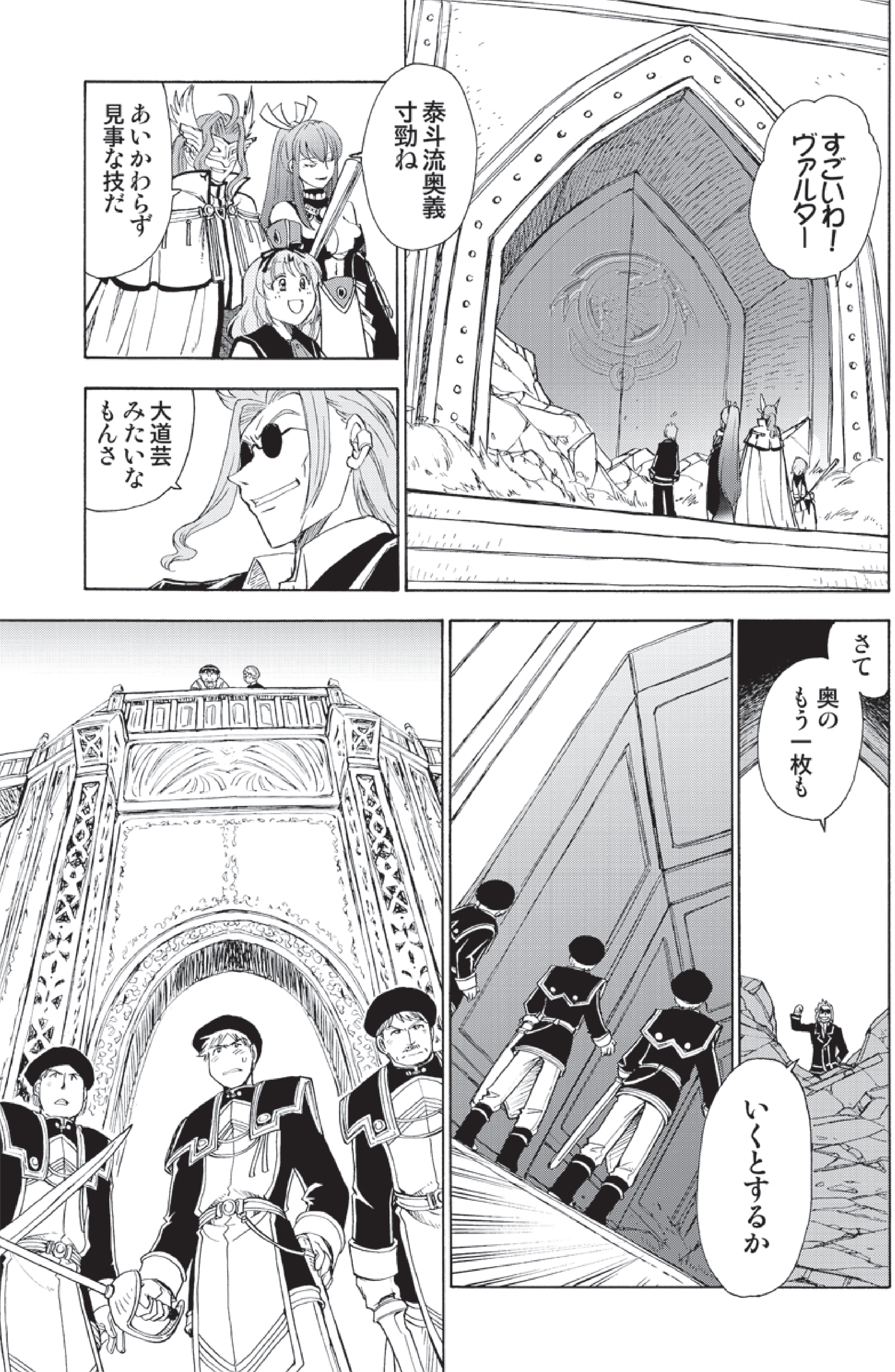

なんで…
こんなことになっちゃってるんですかぁー…
エステルたちが追ってた闇の結社が
とうとう大手を振って現れやがったか！
しかもなんだよ！奴らの武装は！
王国軍は導力兵器が使えねえっていうのに
反則だろ！
このままじゃ王都は制圧されちまうぞ！
…なんとかならねぇのかよ!?
とりあえずりりしいお顔はあとにしてー
わたしたちも逃げましょうよナイアル先輩ー
逃げてどーすんだよ！
せっかく導力カメラが使えるようになったんだ！
この現状撮って撮って撮りまくれ!!
そのことなんですけどー！


この零力場発生器ってやつー！
ラッセル博士がリベール通信社に特別に提供してくれた秘密兵器ですよねぇー!?
どーん！
そんな大事な物勝手に持ち出したりしていいんですかー!?
あとで絶対編集長に怒られますよぉー!!
うぐ…
…いいかドロシー！
俺たちはジャーナリストだ！
俺たちにはリベール国内の異変を記録し世界へ伝える義務がある！
その為には現場をこの目で見ることと
真実を写し出すおまえの写真が必要不可欠なんだ!!
……
へ…編集長には俺がたっぷり怒られる！
…から…
踏ん張ろーぜ？ドロシーちゃん？
…先輩こそいい記事頼みますよ！
合点だ！


ドォォォォ
ドォ
みんなはりきってるわねぇ
王都が壊滅してしまわないかしら
奴らのせいでこっちの手応えがなくなっちまったんじゃねぇのかよ
よくやったと褒めてやりたまえよ
おかげで我らは
なんの苦もなく
グランセル城へたどり着くことができたのだから

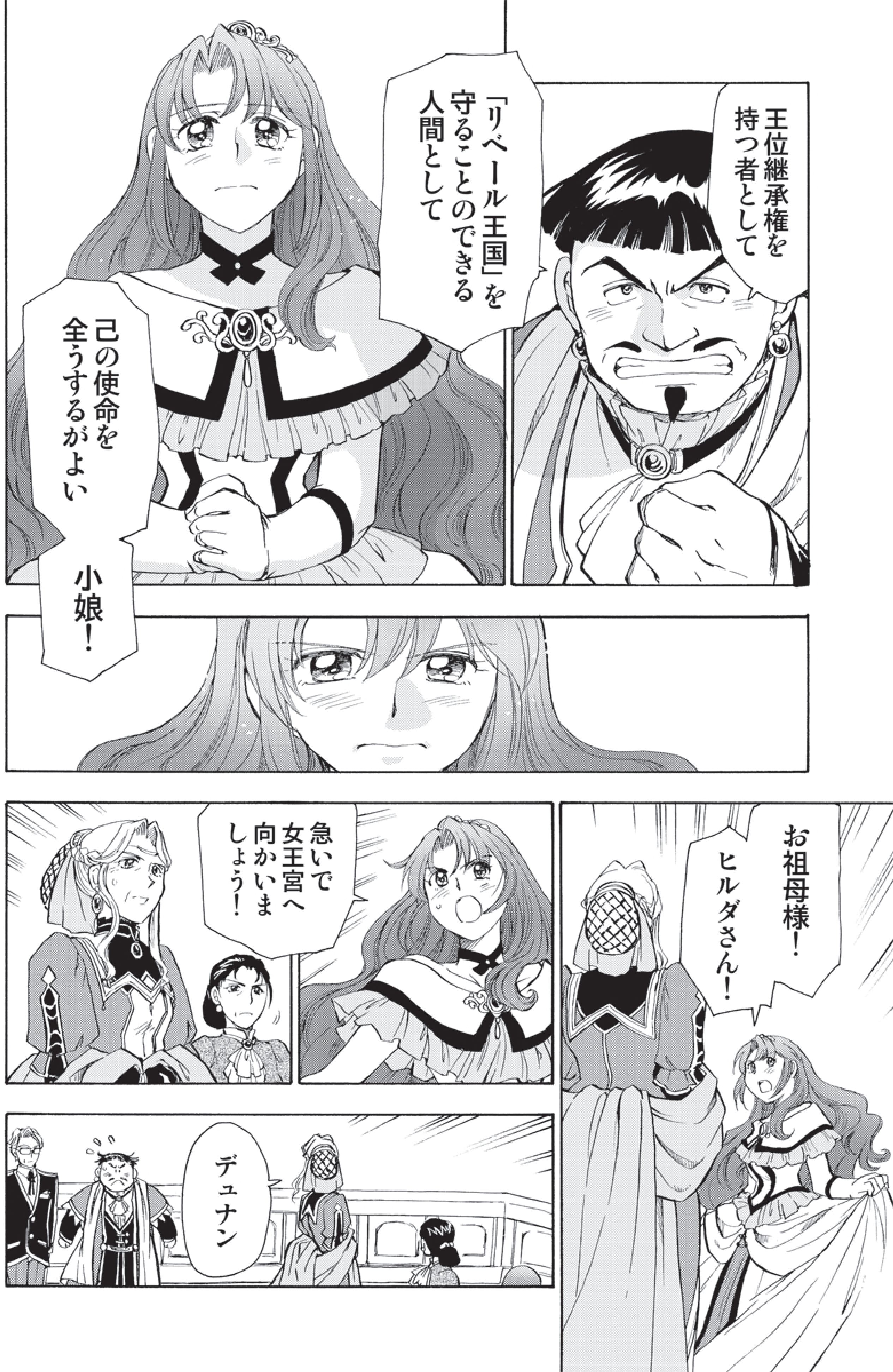

あら？
でもお城の門が……
閉じちゃってるわね
あらまぁ…立派な城門だこと
これを破るのは骨が折れそうね
でも入口はここだけなんでしょう？
…パテル・マテルならなんとかしてくれるのかしら？
あんなデカブツ呼ばれたらますます楽しみがなくなるだろーが！
だったらどうするの？
要は通れるようにすりゃあいいんだろ




すごいわ！ヴァルター
泰斗流奥義寸勁ね
あいかわらず見事な技だ
大道芸みたいなもんさ
さて奥のもう一枚も
いくとするか


まさか こんなに早く 城にたどり 着くなんて
城門ももう 保たんか…
…ユリアが おらぬ今
ここの指揮は 私に任せて もらおう…
え!?
ヒルダ 女官長!
クローディア!!
い… 急いで
アリシア陛下を 女王宮に お連れするがいい!!


お… 小父様?
きゃつらは 陛下の…
女王の身柄を 奪おうとして いるのだぞ!?
グズグズ するな!
リベールの権威が 不穏の輩に 侵されるなど 断じてあってはならぬ!!
で… でしたら 私も ここで
まだ わからんのか! クローディア!
己が 王太女で あることの 意味が!
今そなたが 優先すべきは
女王陛下と!
そなた自身を 守ることだ!!


王位継承権を持つ者として
「リベール王国」を守ることのできる人間として
己の使命を全うするがよい
小娘!
お祖母様!ヒルダさん!
急いで女王宮へ向かいましょう!
デュナン


くれぐれも
無事で…!
心配ご無用!
はっはっは
神をも恐れぬ狼藉者など返り討ちにしてご覧に入れよう!
はっはっは!
はっはっはっ
はぁ…
あー
閣下
お見事でした
今…この時ほど
閣下にお仕えしてよかったと思ったことはありませんなんだぞ
ふん
大げさなやつめ…


ドオオン!!
き…来よったか…
だ…だが ここより先へは 一歩も進ませはせぬ!
私自らが盾となり きゃつらの前に 立ちはだかって
閣下
私が 倒されたら どうか構わず お逃げください


フィリップ!!
ああん?
なんだぁ てめぇは?

英雄伝説 空の軌跡SC 4 ～絆の在り処～

ソラノキセキSC

結社《身喰らう蛇》に囚われたエステル。脱出を試みたエステルだったが、《グロリアス》の強固な守りの前に再びピンチに陥る。そこに現れたのは、これまで行方をくらましていたヨシュアであった……。運命に導かれたふたりが再び巡り会う、誰もが待ち焦がれた瞬間を描く第４巻！





著者：啄木鳥しんき
原作：日本ファルコム

定価：本体800円+税
ISBN:978-4-8021-3156-8

発行：フィールドワイ
発売：メディアパル
フィールドワイ公式HPはこちら www.field-y.co.jp
ファルコムブックス公式HPはこちら www.field-y.co.jp/falcombooks



ファルコムニュース

ファルコムファンに贈る最新ニュースをピックアップ！

エレボニア帝国編2作品が便利機能追加&新価格で登場！

『英雄伝説 閃の軌跡Ⅲスーパープライス』『英雄伝説 閃の軌跡Ⅳスーパープライス』2020年10月29日（木）発売決定！

巨大軍事国家エレボニア帝国編・新章として2017年に発売されたPlayStation®4『英雄伝説 閃の軌跡Ⅲ』、エレボニア帝国編の完結作として2018年に発売されたPlayStation®4『英雄伝説 閃の軌跡Ⅳ-THE END OF SAGA-』の2作品が、さらにお買い求めやすい価格になった「スーパープライス」版として登場！

今回の「スーパープライス」版ではPlayStation®4『英雄伝説 閃の軌跡Ⅰ：改』以降好評を博している“高速スキップモード”を追加機能として搭載しているため、ボタン切り替えでフィールド移動やバトルをより快適にお楽しみいただくことが可能です。


▲「英雄伝説 閃の軌跡Ⅳ スーパープライス」ゲーム画面






▲「英雄伝説 閃の軌跡Ⅲ スーパープライス」ゲーム画面

※現在発売中のPlayStation®4「英雄伝説 閃の軌跡Ⅲ」、PlayStation®4「英雄伝説 閃の軌跡Ⅳ -THE END OF SAGA-」は後日配信予定のアップデートにより“高速スキップモード”機能が追加されます。

早期購入特典として「人気DLCアイテム15点」を無料配信！

「英雄伝説 閃の軌跡Ⅲ スーパープライス」「英雄伝説 閃の軌跡Ⅳ スーパープライス」発売当日の2020年10月29日（木）より、各キャラクターの私服、水着といった衣装や人気アタッチアイテム「はぐはぐ」シリーズ計15アイテムを早期購入特典としてPS Storeで無料配信！

英雄伝説 閃の軌跡Ⅲ スーパープライス 早期購入特典DLC（計15点）

▼私服衣装（リィン／ユウナ／クルト／アルティナ／ミュゼ／アッシュ）
▼水着衣装（ユウナ／アルティナ／ミュゼ）
▼ユウナオリジナル衣装「クロスベル・チア！」
▼はぐはぐシリーズ（黒兎／エリィ／制服レン／オズぼん／ダーナ）

英雄伝説 閃の軌跡Ⅳ スーパープライス 早期購入特典DLC（計15点）

▼水着衣装（アリサ／ラウラ／エマ／フィー／サラ／ユウナ／アルティナ／ミュゼ）
▼衣装「メンズ軍服セット」
▼ランディ用オリジナルジャケット
▼ティータ用オリジナル作業着
▼はぐはぐシリーズ（ミリアム／オーレリア／リーシャ／巫女トワ）

■商品概要
タイトル：英雄伝説 閃の軌跡Ⅲ スーパープライス
ジャンル：ストーリーRPG
対応機種：PlayStation®4
発売日：2020年10月29日（木）
価格：パッケージ版　3,980円（税抜）／ダウンロード版　3,630円（税込）

タイトル：英雄伝説 閃の軌跡Ⅳ スーパープライス
ジャンル：ストーリーRPG
対応機種：PlayStation®4
発売日：2020年10月29日（木）
価格：パッケージ版　3,980円（税抜）／ダウンロード版　3,630円（税込）

■『英雄伝説 閃の軌跡Ⅲ』公式サイト
https://www.falcom.co.jp/sen3/
■『英雄伝説 閃の軌跡Ⅳ -THE END OF SAGA-』公式サイト
https://www.falcom.co.jp/sen4/
■『軌跡』シリーズポータルサイト
https://www.falcom.co.jp/kiseki/

OMNI SHOPから『軌跡シリーズ』「ゆるみっしぃ」の新作夏アイテムが多数登場！

工画堂スタジオが運営するECサイト『OMNI SHOP』から、人気商品「ゆるほわ」シリーズ第2弾を含めた新作アイテムが多数登場！

「英雄伝説 創の軌跡」アクリルダイカットスマホスタンド（全10種）

アクリル素材で制作されたスマホスタンド。自立させられるので、手頃なスマホ置き場としてご利用いただけます。



［ラインナップ］
《C》／スウィン／ナーディア／ラピス／リィン／ティオ／ランディ／ノエル／ワジ／リーシャ
■価格：各1,650円

「軌跡シリーズ」ゆるほわ♪チャーム 第2弾（全6種）

アクリルチャームとしても、アクリルスタンドとしても使える2WAY仕様！
ゆるほわ第2弾は、歴代シリーズで主人公のヒロインや相棒を務めたキャラクターたちをラインナップ！

［ラインナップ］
ヨシュア／リース／エリィ／アリサ／クロウ／クレハ
■価格：1個（ランダム販売）　770円／6種セット　4,620円



「軌跡シリーズ」ゆるほわ♪缶バッジ 第2弾（全6種）

アクリルチャームとお揃いイラストの大きめ缶バッジ。バッジには連結用の金具が付いているため、チャームやキーホルダーと連結させて様々な組み合わせをお楽しみいただけます。

［ラインナップ］
ヨシュア／リース／エリィ／アリサ／クロウ／クレハ
■価格：1個（ランダム販売）　330円／6種セット　1,980円



「英雄伝説 閃の軌跡Ⅳ」水着3Dver. ホログラムカード（全10種）

キラキラと輝く特殊加工が施された、ポストカードサイズのクリアカード。「閃の軌跡Ⅳ」のヒロインキャラが集合した、水着姿の一味違った夏らしいグッズです！



［ラインナップ］
セット【A】：アリサ／ラウラ／フィー／エマ／サラ
セット【B】：ラウラ&アリサ&エマ／ラウラ／ユウナ／アルティナ／ミュゼ
■価格：1枚（ランダム販売）　385円／
　セット【A】　1,650円／セット【B】　1,650円

ゆるみっしぃ クールタオル&缶バッジセット

水に濡らして涼しい、冷感生地のクールタオル。夏らしいみっしぃのイラストを使用したシンプルなデザインで、普段使いに抜群で、首や手、頭と使い方は様々。特典として、夏らしいサーフィンみっしぃの缶バッジがセットになっています。



■価格：1,870円



■通販 URL：https://omnishop.kogado.com/



『イースシリーズ』と『閃の軌跡Ⅳ』の新作夏グッズ発売！

GraffArt ShopとA3 MARKETにて、『イースシリーズ』と『閃の軌跡Ⅳ』の新商品を発売。今すぐチェックしよう！

『イースシリーズ』夏グラフアート新商品

目玉のブラインド商品のほか、夏らしいイラストを使用したアイテムが盛りだくさん！



アクリルぷちスタンド　キャラクリアケース　ハードケース　缶バッジ

■発売日：8月29日（土）
■店舗：GraffArtShop 池袋本店、なんば店、名古屋店
※Falcom Base内
■通販：8月29日（土）午前10時～ GraffArt SHOP with A3 MARKET ONLINE
URL：作成中

『閃の軌跡Ⅳ』ミニキャラ夏ver.新商品発売！

夏衣装のキャラたちを存分に使用したアイテムが勢ぞろい。普段と違った雰囲気のキャラたちに癒されよう！



アクリルキーホルダー　スマキャラスタンド　キャラバス　缶バッジ

合計400名様に当たる！

『英雄伝説 創の軌跡』WEB抽選会を開催！

『英雄伝説 創の軌跡』の発売を記念して、日本中・世界中どこからでも参加可能なWEB抽選会を開催！　ゲーム序盤をプレイしてゲーム画面の白枠に当てはまるキーワードをお答えください。正解者の中から、抽選で400名様に豪華グッズをプレゼント！



【問題】

RF（ラインフォルト）社のビルでティータの母、エリカ博士はどんな“ペナルティ”を科すと発言したでしょうか？
白い空欄にあてはまる言葉をお答えください。

《景品》

『創の軌跡』非売品A4クリアファイル4枚セット：380名様



タペストリー2本セット：各5名様／計20名様



■応募期間：2020年8月27日（木）～9月22日（祝火）
■WEB抽選会ページ　https://www.falcom.co.jp/hajimari/news/campaign/



8月の
新／衣装替えキャラクターをチェック！

緋のローゼリア
『閃の軌跡Ⅳ』から《魔女の眷属》の長・緋のローゼリアが参戦！　エマやヴィータの魔術の師匠なだけに、その実力は折り紙付きだ。

水着・シャロン
トレードマークのメイド服から一転、純白の水着に身を包んだシャロン。各所に得物の鋼糸をイメージさせる意匠が施されているのが心憎い。

浴衣・エリゼ
エリゼは普段のイメージとは違い、華やかで可愛らしい浴衣姿に。貞淑な彼女らしからぬコーディネートは親友の皇女・アルフィンの見立てだろうか。

お祭り・ダドリー
普段はお硬いダドリーも今日は休日モード？　シックな浴衣で澄まし顔も、内心はお祭りが楽しみな様子？

9月の新規衣装替えキャラクターは？

THE LEGEND OF HEROES 暁の軌跡
アカツキノキセキ

毎月魅力的な新キャラクターや衣装替えキャラクターが大注目の『英雄伝説 暁の軌跡』。
８月も先月に引き続き水着が衣装替えとして登場するほか、夏祭りシーズンということで恒例の浴衣衣装も登場！　さらに『閃の軌跡Ⅳ』から、緋のローゼリアが参戦！

『英雄伝説 暁の軌跡』公式ホームページ
http://akatuki.ujj.co.jp/

公式ツイッター
https://twitter.com/akatsuki_ujj

メインストーリー 第７章第６弾「毒蛇の輪郭／前篇」が実装！

エイヤの民に別れを告げ、試験班は公都アーデントへ帰還する。
彼らと彼らの島の伝統を護る為に、一刻も早く《戦争卿》の正体を暴かなければならない。
“毒蛇”は姿を隠し、闇の中から覗いている。
研ぎ澄まされた毒牙が獲物を待ち望んでいる。
空に潜む脅威はその輪郭を見せつけ、人々の絶望を欲していた――









※画像は開発中のものです。　※上記のイベントは状況により内容の変更を行う場合があります。

《マーシア孤児院》――。
ルーアンへと向かう街道から、北へと折れた先にその建物はあった。
「どうやらここで間違いなさそうだね」
ヨシュアが言った。
エステルは細い道の先に立つ小さな家を見つめる。

英雄伝説 空の軌跡2 ～黒のオーブメント～

第2回

『創の軌跡』の発売を記念して
『軌跡』シリーズの原点を振り返る！



リベール王国を舞台とした『英雄伝説 空の軌跡』、クロスベル自治州を舞台とした『英雄伝説 零の軌跡』と『英雄伝説 碧の軌跡』。そして、エレボニア帝国を舞台とした『英雄伝説 閃の軌跡』。これまでゼムリア大国西部の各国を舞台として物語が紡がれてきた『軌跡』シリーズだが、最新作『英雄伝説 創の軌跡』は、これまでのシリーズに登場したキャラクターや世界観をより掘り下げていく作品ということで、シリーズの原点ともいえる第１作『英雄伝説 空の軌跡 FC』ノベライズを好評連載中！

製品情報
好評発売中
著　　　:はせがわみやび
イラスト:ワダアルコ
定　　価:1,200円(税別)

石ではなく木で造られた二階建ての家だ。ひょっとしたら親子三人で暮らしているエステルの家よりも小さいかもしれない。
家の周りにはわずかな畑。小さな畑で、とても自給自足できるとは思えない……。
エステルの紋章を盗んだ少年は、ここに住んでいるらしかった。マノリアの村の人たちの何人かが帽子を被った少年に心当たりがあったのだ。子どもの名はクラム。《マーシア孤児院》で暮らしている孤児だ。イタズラっ子で知られていた。
孤児院に住んでいる大人は、院長であるテレサという女性だけで、あとはすべてエステルよりも年下の子どもだけらしい。それを聞いて、あれこれ考えてしまったエステルだが……。
「よし、決めた！　なんであれ、人の物を取るのは悪いこと。まずお仕置きをしっかりしてからよね！」
「お手柔らかにね」
細い道を辿ってゆくと、家の前の空き地で子どもたちが遊んでいるのが目に入る。
小さな男の子が二人、女の子がひとり。
帽子を被ったほうの男の子に、エステルは見覚えがあった。間違いない。あの子だ。
都合よくエステルたちに背を向けている。近づいて、いきなり声をかけた。
「こら！」
跳び上がらんばかりに驚いて、エステルのほうへと向きなおる。

「げっ！　おまえ……どうして……」
「ふふん。遊撃士を舐めないでよね」
「く、くそっ！」
脱兎のごとく逃げだした。
すかさずエステルも追いかける。
ハーブの生えた畑の手前で追いついた。首根っこをつかんで引き寄せて、男の子の頭を脇で抱えてぎりぎりと締めあげる。
「イテ！　イテ！　は、放せぇぇ！」
「だったら、あたしの紋章を返しなさいってーの！」
「オ、オイラが取ったっていう証拠はあんのかよ～～～～～」
「なあにを生意気なこと言ってるかな。だったら、なんであたしの顔を見た瞬間に逃げだしてんのよ。逆さにして振り回してあげてもいいのよ！」
「ギャクタイ、はんたい！　いててて！」
「ほらほらほ――」
「ジーク！」
声がした次の瞬間だった。
大きな白い鳥が急降下してきて、エステルの頬をわずかに掠めたかと思うと、ふたたび空へ

と舞い上がった。
「わわっ⁉　な、何？」
　空へと上昇した鳥はゆっくりと旋回してから降りてきて、孤児院の前に立っている少女の肩へと舞い降りる。彼女のスカートには、家の前で遊んでいたうちの残りの二人、男の子と女の子がしがみついていた。彼らが家の中から少女を呼んできたのだろう。
「その子から離れてください！　それ以上の乱暴は許しませ――あら？」
「あ、さっきの……」
　白い鳥を肩に載せた少女は、ジェニス王立学園の制服を着ていた。マノリアの街で出会った少女だったのだ。帽子を被った男の子を探していた少女だ。
「クローゼ姉ちゃん、助けて！　オイラ、何もしてないのに、この姉ちゃんがいじめるんだ！」
「な、なに言ってんのよ。あたしの紋章、取ったでしょ～～～が！」
「証拠はあんのかよ～～～～！」
「うぬぬぬ」
　男の子はクローゼと呼んだ少女の後ろに隠れると、エステルに向かって舌を出している。さすがに、さきほどみたいに首根っこをつかんで逆さにして振り回す、というわけにはいかないだろう。
（止められちゃうだろうし……ううん。どうしたら……）

　パン、パンと手を打ち鳴らす音が聞こえた。
「何ですか、この騒ぎは？」
　玄関の扉を開けて、年配の女性が顔を出した。
「あっ、テレサ先生」
　どうやら孤児院の院長らしかった。彼女はその場にいた者の顔をひとどおり見渡すと、大きくため息をついた。
「またクラムが何かしでかしたみたいですね」
「オ、オイラ別になにもやって……」
「嘘おっしゃい、あたしの紋章を取った――」
　言い掛けたエステルを、ヨシュアが肩を叩いて止めた。宥めるような視線を向けてくる。
　それからヨシュアは、テレサ院長へと顔を向けた。見ててごらん、という表情をしている。
　テレサ院長がクラムに問いかけるところだった。
「本当にやっていないのですか？」
「うん、あたりまえじゃん！」
「女神さまにも誓えますか？」
「ち、誓えるよ！」
「そう……。では、さっきバッジみたいな物が子ども部屋に落ちていたけど……あなたの物じ

ゃありませんね？」
「えっ。だってオイラ、ズボンのポケットにちゃんと――あ」
　クラムが、しまった、という顔をした。
「やっぱり～！」
「まあ……クラム、あなた……」
　クローゼが呆れた顔になった。
「クラムおにぃちゃんってば～」
「ってば～」
　年少組がクローゼをマネして声を揃えた。
「見事な誘導ですね」
　ヨシュアが院長へと賛辞を贈る。
　テレサ院長は静かな声でクラムを諭した。
「お返しなさい」
「くっ……わかったよ！」
　紋章をエステルに向かって投げつけると、踵を返してクラムは逃げていった。
「クラム君！」
　クローゼが呼びかけても振り返らない。街道のほうへと逃げていく。

「大丈夫。頭が冷えたら戻ってくるでしょう。それよりも、立ち話もなんですから、どうぞ中に入りませんか？　ちょうど午後のお茶の時間ですしね」
　テレサ院長が言った。
（この院長先生ってば、すごい！）
　穏やかな笑みを浮かべるテレサ院長を見ながらエステルは思った。

† † †

《マーシア孤児院》は、テレサ院長が独力で切り盛りしている孤児院だった。
　住んでいるのは親を失った子どもたちばかり。やはりというか、畑からの収穫だけでは食べていくことはできず、それでもテレサ院長が趣味で始めたというハーブが好評で、マノリアの村の酒場などに買ってもらって、生計の足しにしているという。
　エステルとヨシュアはテレサ院長が手ずから淹れてくれたハーブティーとアップルパイを御馳走になってしまった。クラムが迷惑を掛けたお詫びだというのだが、エステルとしては充分にお釣りがくるほど美味しかった。
「あの子もほんとにイタズラ好きで……悪気はないのですが……」
「あは。もういいですよ。ちゃんと紋章も戻ってきたし。アップルパイも美味しかったし」



「ありがとうございます。そのアップルパイはクローゼが作ってくれたんですよ。クローゼは料理が上手なんです」

小さな部屋の中の、これだけは大きなテーブル（子どもたちが全員で食卓を囲めるようにだろう）の隣に腰掛けていたクローゼが、テレサ院長に褒められて照れていた。

「ホント、美味しかったもん！」

「そうだね」

「そんな……。あの、私のほうこそ、すごく勘違いしてしまって、失礼なことを……」

「もういいってば。でも、あの鷹には驚いちゃったけどね」

「あ、ジークのことですね。あの子はシロハヤブサなんです」

クローゼが言って、ヨシュアがなるほどと頷いた。

「隼だったのか……。白い隼というとリベール王国の国鳥だね。よく訓練されているみたいだけど、君のペットなの？」

「いいえ、私が飼っているわけじゃなくて……。お友達なんです」

「白い隼か」

ヨシュアがもういちど繰り返した。何か考えているようだが、エステルには判らない。まあ、ヨシュアがあれこれ考え事をするのはいつものことだ。

「は～、でも、すごいお友達もいたもんね」

エステルは素直に感心した。さらりと隼を友達と呼ぶクローゼにも好感が持てる。ふたたび照れた顔をする少女を見て、そういえば、とエステルは思い出した。

「その制服……ジェニス王立学園のものなんでしょ。学園って、ここから近いの？」

「そう、ですね。ええと、ルーアンに向かう途中で街道を左に折れた先にあります。ここからだと、ルーアンの街に行くのと同じくらいの距離でしょうか。近いので、よく遊びに来てしまうんです」

クローゼの話を聞いて、エステルは頭の中で地図を広げた。

西の海岸からマノリアの村はやや東にあるが、海もそのあたりで東に食い込んできていたから、海岸沿いに歩くことができた。そこから大陸は南へと伸びていて、海沿いに歩けば、ルーアンの街だった。

ということは、学園はちょっと内陸に入ったところにあるわけだ。

「あなたが遊びに来てくれるから、子どもたちは大喜びですよ」

「テレサ先生……」

「でも、こちらに構いすぎて学園生活をおろそかにしないようにね」

「はい」

クローゼは素直に頷いた。性格も、とっても良さそうだ。

エステルはふと思う。

「学園生活かぁ。そういうのも一度は体験してみたかったわね」

「教会の日曜学校は週に一度しかなかったからね。ただ、王立学園の入学試験はかなり難しいっていう話だけど？」

ヨシュアに言われて、エステルは頭を抱えた。

「そ、そうか〜。あたしには逆立ちしても無理かも」

そう零したら、クローゼは遊撃士になるほうが遥かに難しいなんて言うのだった。

「私のほうこそ憧れちゃいます」

「えへへ。なんだかくすぐったいわね。まあ、まだ見習いみたいなもんだし」

長居をしてはルーアンの街に辿りつけなくなるからと、お茶をもう一杯お代わりしたところで旅立つことになった。

家の出口まで、子どもたちが見送ってくれる。エステルが手を振ると、振り返してくれた。残念ながらクラムという名のあの子はいなかった。

クローゼと共に外に出る。空の上から「ピューイ！」と甲高い声が降ってきた。白い隼が優雅に翼を広げて降りてきて、クローゼの腕に止まった。

「ジーク。待っていてくれたの？」

「ピューイ！」

「そう。このひとたちは敵ではないの。エステルさんとヨシュアさん。覚えてあげてね」

「ピューイ！」
　ひと声鳴くと、ふたたび空へと舞い上がった。
「すごい。まさか、あの子と喋れるの⁉」
「さすがにそこまでは……。でも、なんとなく何が言いたいのかは判るんです。気持ちが通じ合っているみたいな感じで。錯覚でなければ、ですけど」
「ほえぇ」
　エステルにはそれでも充分驚きだ。
「そういえば、エステルさんたちはルーアンの街に行かれるんですよね？」
「うん。あたしたち見習いは、支部で転属手続きをしないと仕事できないから」
「遊撃士協会の支部は、何度か訪れたことがあります」
「行ったことがあるの？」
「はい。学園の近くに魔獣が出たことがあって、その退治を先生の代理で頼みに。よかったら、案内しましょうか？」
　クローゼの申し出はすごくありがたかった。ルーアン地方を訪れるのは、エステルもヨシュアも初めてなのだ。
　孤児院からの小道を辿って街道へと戻る。
　ルーアンに向かって歩き出そうとしたところで、木陰から声が掛かった。

†　†　†

「クローゼ姉ちゃん」
　大きな木の後ろから掛かった声に、エステルたちは全員が顔を向ける。
「まあ、クラム君」
「あ、イタズラ小僧！」
　木の陰から現れたのは、エステルから紋章を奪い取っていった男の子――クラムだった。
「姉ちゃん……ゴメン」
「ふふ。もう怒ってないから安心して。でも、ひとりでこんな処で遊んじゃだめよ。魔獣に襲われたらどうするの？」
「……オイラ」
　何か言いたそうにしているクラムを見て、クローゼが小さく頷いた。肩をぽんと叩くと、彼の身体をエステルに向かって押し出してくる。
「ほら」
「う……」
「せっかく、ここまで来たんでしょ。勇気を出して」

「あ……う。わ、悪かったよ！」
ぶっきらぼうに言って、エステルに向かって頭を下げた。
（あ……そういうことか）
謝るために、クラムは待っていたのだ。
「ま、まあ。うん、素直なとこ、あるじゃないの」
「う、うるさいな。オイラみたいな子どもに簡単に大事なものを取られちゃったくせに。ホントに、ねーちゃん遊撃士かよ！」
「うぐっ」
「へん、だ。あばよ！」
言い捨てて、クラムは孤児院のほうへと走り去っていった。
「あああ、あいつー！　や、やっぱり可愛くない！」
「まあまあ。あれは照れ隠しだってば」
怒るエステルを、ヨシュアが宥める。そんなエステルたちを黙って見ていたクローゼがうらやましいとぽつりと言った。
「苗字が同じブライトということは、お二人は兄妹なんですよね」
「そうよ。あたしが姉でヨシュアが弟」
「一年も違わないくせに」
「どんなに間が短かろうと姉は姉だもん！　家に来たのはヨシュアのほうが後なんだから、弟なの！」
何気なく言った言葉にクローゼが目を見開いた。
「家に来た……？」
「ああ。僕は父さんに拾われたんだ。だから弟」
「あ……そういう……」
クローゼがすまなそうな顔をした。
「気にしないでいいわよ。もうずっと一緒だから、あたしもホントの弟だと思っているし。ヨシュアだってそうでしょ」
「……まあね」
そのときヨシュアは一瞬だけ言葉を詰まらせたのだが、エステルは気づかなかった。
「だよね！」
「仲がよさそうで羨ましいです」
「でも、役割を考えると、姉弟というより、兄と妹という気もするけど」
「ヨシュアってば！」
「ふふ。本当に仲良し。私はひとりっ子でしたから。だから、あそこの雰囲気に憧れてしまうんですけど……」

そう言って、クローゼは孤児院のほうを振り返った。
それからエステルたちに視線を戻して、「では、行きましょう」と言った。そのときには、ちょっとだけ見せた寂しげな顔はもうなくて……。
エステルたちは海岸沿いを東へと歩いた。
途中に確かに分かれ道があった。
「学園はここを左に行くんです」
「ねえ。なんだったら、ここまででもいいよ？　だって、帰るのが遅くなっちゃう」
「お気遣いありがとうございます。でも、大丈夫です。今日いっぱい外出許可を貰っていますから。ルーアンに寄ってからで充分に間に合います」
確かにそこからルーアンまでは近かった。西の空に傾いた太陽も、地平線までの距離をまだ充分に残していた。
街並が見えてきたところで、エステルは思わず声を上げてしまう。
「うわぁ、キレイ……真っ白！」
「確かにね。ルーアンを指して、『砂浜に落ちた貝殻』と綴った詩人もいるらしいよ」
「ほんと、そんな感じ」
ルーアンの街の印象は「白」だ。
見えている建物の煉瓦も石畳も白くて、日差しを受けて輝いている。少し視線を右手に振れば、遥か彼方までつづく青い海が目に入った。海の青と街の白の対比がまた美しい。まるで絵に描いたような風景だ。
「ルーアンの二つ名は、『海港都市』だからね」
「海と港の街かあ。うん。ぴったりだね！」
白い石畳へと変わった街道を進むと、街の城壁と門が見えてくる。
門を越えて街へと入った。
「遊撃士協会の支部は、このまままっすぐに道を歩いて、小さな橋を渡った処で左に曲がります。そこまでは御一緒しますから」
「ありがとう！」
もう少しでクローゼとの旅もおしまいかと思うと、エステルはちょっとだけ寂しいものを感じてしまう。旅に出てから――いや、故郷のロレントから考えても、エステルの周りにはあまり同世代の女の子がいなかった。
（いい子だし。礼儀正しいし）
さすがは名門校のお嬢様だ。そのくせ、偉ぶらない。大きな白い隼と友だちだったりと、なんだか不思議な所も多かった。
エステルたち三人は小さな橋を渡ってから、右手に大きなホテルがある処を左へと曲がる。
通りの左手に見覚えのある看板――楯に手甲を重ねた意匠が見えた。遊撃士協会の支部だ。

扉を開けて、なかへと声を掛ける。
受付には誰もいなかった。依頼を貼りつけた掲示板があって、前にいた女性が振り返った。
「何か用かな？　ジャンは二階で客と打ち合わせ中なんだ。話なら、あたしが代わりに聞くけど？」
カルナと名乗ったその女性は、赤いバンダナを額に締めた背の高い遊撃士だった。長い髪を頭の後ろの高い所で絞って馬の尻尾のように垂らしている。格好いいお姉さん、という感じのひとだ。
「……ん？　その紋章は……。なんだ同業者か」
「うん。準だけど。あたしはエステル」
「同じく準遊撃士のヨシュアです」
「エステルとヨシュア？　ああ、そうかあんたたちが……」
「あたしたちのこと、知ってるの？」
「すごい。エステルさんたち、有名なんですね」
後ろで見守ってくれていたクローゼが言った。
「ま、まさか！　有名だなんて……」
「おや？　そっちの子は？　遊撃士じゃないようだが」
「クローゼさんは、僕たちをここまで案内してくれたんです」

如才なくヨシュアがクローゼを紹介する。エステルたちがカルナに頭を下げると、クローゼもぺこりと頭を下げた。
「ああ、なるほど。でも、あんたたちが有名なのは本当だよ。ロレントから来たエステルとヨシュアの新人コンビがボースで大活躍した……ってね」
「あ、あははは。そんなぁ」
エステルとしては大活躍なんて言われると照れてしまう。
（っと、いけない、いけない！）
頭をよぎったのは、アガットの「浮かれるな」という台詞だった。こういうときに喜びすぎるなと諭していたのだろう。
「あの……時間が掛かるようなら、少し街を見てきていいですか？」
ヨシュアが言った。
「そうだね。転属手続きとなると、ジャンがやらないと駄目だし。日が暮れる前に戻ればいいよ。時間をつぶしておいで」
「判りました」
「それなら、もう少しだけ、私が案内します。見せたいものがあるんです」
「いいの⁉　ありがと、クローゼ！」
「決まりだね。じゃ早速行こうか」

†　†　†

リベール王国の中央に、ヴァレリア湖と呼ばれる巨大な湖がある。
ヴァレリア湖から西の海へと向かって流れるのがルビーヌ川で、ルーアンの街で海へと注ぎ込んでいた。
ルーアンは、ルビーヌ川の河口に発達した街だった。白い煉瓦の街並が川によって北と南に分かれていた。個々に発達した北と南の街は、過去に遡れば色々と諍いもあったらしいが、今はルーアンの街としてひとつにまとまっている。
まとまるきっかけとなったのが――。
「うわあ、おっきい……。これがクローゼの見せたかったものなの？」
エステルは思わず声をあげていた。
「はい。《ラングランド大橋》です」
ヨシュアが感嘆する。
「すごいな……。向こうまで百アージュはありそうだ」
エステルたちの前には、左から右へと向かってルビーヌ川が流れていて、巨大な石造りの橋がその川を越えて向こう岸へと架かっていた。

足下からまっすぐに川向こうへと伸びる幅広のその橋は、遠くに向かうにつれて細くなり、人が豆粒ほどになったあたりで終わっている。幅は六アージュあまり、長さが百アージュは越えそうなほどで、ひっきりなしに人や荷車が通っていた。
「この橋が四十年前に作られて、街は大きく変わったんです。それまでは南と北は渡し船を使って行き来するしかなかったんですよ」
クローゼが言った。
その言葉に素直に頷いていたエステルだが、ふと疑問が浮かぶ。
「ん？　でも、いくら大きいから造るのが大変っていっても、単なる橋を架けるだけなら、もっと昔でもできたような気も……」
「橋を造っちゃいけなかったんです。王都からもそう命じられていましたし」
「へ？　なんで……」
「船が通れなくなるからだと思うよ」
ヨシュアの言葉にクローゼが頷く。
「はい。このルビーヌ川は、海と王都とを結びつける唯一の川でしたから」
「今は飛行船があるけど、当事の輸送の中心は海上輸送船だったからね。ここに橋を架けちゃうと、川を遡って王都に荷が運べなくなる」
「なるほど……それで橋はダメだったのね」

「ただ、飛行船があるっていっても、今でも他国との貿易は船がけっこう使われているよね？　この川を遡る船もまだまだあるはず。ということは……」

「ちょ、ちょっと待って。どんどん話を進めないでよっ」

先走るヨシュアの解説にエステルの頭が追い付いていかない。必死に思考を巡らせた。

（ヨシュアってば、いつだって自分だけで先に判っちゃうんだから！　ええと……）

橋があると船の航行の邪魔になることは理解できた。大きな輸送船が川を遡るとき、橋があると、ぶつかって通れなくなるからだ。

でも、ヨシュアは「今でもまだ船は使われている」と言ったわけで……。

（あれれ？）

エステルは矛盾に気づいた。

（この橋があるのに、どうやって貨物船は川を遡っていけるんだろ？）

そこまで思考を進めたところで、クローゼが種明かしをしてくれる。

「《ラングランド大橋》は、『跳ね橋』なんです」

「跳ね橋……って、あれだよね。橋が上に持ちあがってしまうってやつ……」

目の前の橋を見た。

（えっ……まさか！）

「この橋は、中央で二つに分かれるんです。こっち側と向こう側で分かれて、両方が上に向か

って持ち上げられる。太い鉄の鎖で引っ張るんですよ。その鎖は――」

そこでクローゼは手を振って、エステルたちの視線を右と左に注目させた。

ようやく気付く。橋の袂の左右には、巨大な塔が建っていて、まるで二本の腕のように、エステルたちの頭上に見えている「あるもの」を支えていた。

頭の上にあるもの――巨大な巻き車を。

「鎖は、この大きな筒に巻きつけられるんです」

見れば、たしかに太い筒に太い鉄の鎖が巻きついている。滑車になっていて、鎖を手繰り寄せて巻きつけると、鎖に引っ張られて橋があがる仕掛けだった。お城の堀に架けた跳ね橋を上げるのと理屈は同じだが、遥かに巨大な仕掛けだった。

百アージュ……半分だとして五十アージュにもなる石造りの橋を持ち上げるなんて。

「導力革命のおかげです」

「やはり導力器（オーブメント）の力を使っているのか……」

「すっごい……！」

導力器の産み出す巨大な力を利用して、船を通らせてかつ橋を架けるという、一見矛盾する要求を両方とも満たしてみせたわけだ。確かにクローゼが、ぜひと見せたがるのもわかる。これはリベール王国内でも稀有の巨大仕掛けだろう。

「跳ね橋を上げるのは、日に三回と決められています。今からだったら、夕方のが見られると

思いますよ」
「それは見逃さないようにしないと！」
「そうだね」
「じゃあ、後は港に案内して、私は学園に戻りますね。この橋を渡ればすぐですから」
エステルたちは街の南側へ《ラングランド大橋》を渡った。
街の南側は、大きな倉庫が立ち並ぶ港になっていた。飛行船が就航してから海洋輸送は減ったとはいえ、今でも外国からの荷物が運ばれてきては預けられ、国内のあちこちにまた運ばれてゆくという。
「でも、空き倉庫になってしまった所もあって、そこを溜まり場にしている人たちがいて問題になっているらしいです」
クローゼが言ったときだった。
「待ちなよ、嬢ちゃんたち」
波止場のほうからやってきた柄の悪そうな三人連れがエステルたちに声をかけてきた。

† † †

「え、あたしたち？」

エステルはびっくりした。
街中を歩いていて、男の人から声を掛けられるなんて初めてだ。
男の「子」からならある。思いっきり年下。虫取りに行こうぜとか、缶蹴りをしようぜとか、鬼ごっこしようぜとか。しかし、今声をかけてきたのは、どう見ても厄介ごとを背負ってきたような男たちで、エステルとしてはちっとも嬉しくない。
「なにか御用でしょうか？」
クローゼが問いかけた。
「ヒマなんだったら、俺たちと遊ばないかなぁって思ってさ！」
三人の男たちは、エステルたちよりも少し年上な感じで、全員がニヤニヤとした笑みを浮かべながら輪を縮めてくる。
「間に合ってるわ。ルーアンの見学中なの。悪いけど、他をあたってくれない？」
エステルはきっぱりと断った。
「お。強気な態度。ちょっと好みかも」
「ふえっ？」
「ほらほら、そう言わずにさあ」
「シ、シツコイってーの！」
こちらにはヨシュアがいたが、不良たちは彼の外見だけを見て、生っちろい小僧などと揶揄

してくる。これにはエステルもむっとしてしまった。無視しようにも、三人はじりじりと囲みを狭めてきた。どうやら素直に言うことを聞く気はないらしい。
頭にきたエステルが背負った棍へと手を伸ばしたときだ。エステルを庇うようにヨシュアが前に立った。
「彼女たちに手を出したら……手加減しませんよ」
そう言って、冷ややかな瞳で三人組を睨みつける。
「う……」
「な、なんだよ……」
ヨシュアは静かに見つめただけだった。それだけで、男たちはヨシュアの迫力に呑まれた。思わず声を失い、歩みを止めてしまう。
そこに声が割り込んできた。
「お前たち、何をしているんだ！」
声に、全員が振り返る。
髪を真ん中で丁寧にわけた実直そうな青年がやってきて、エステルたちと不良たちの間に割って入ってきた。
「また、お前たちか！　懲りもせず……いい年をして恥ずかしくないのか！」
「う、うるせぇ！　この、市長の腰巾着が……！」
「なんだと……」
「呼んだかね？」
青年の後ろから、またひとり現れた。
「ダ、ダルモア⁉」
不良のひとりが呻くように言った。
今度は髭を生やした中年の男性だ。髪を短く刈り上げており、仕立てのいい立派な服を着ている。
エステルは傍らのクローゼに向かって囁く。
「だ、誰なのかな……？」
背はさほど高くないが、やたらと貫禄のある人物だ。話し方も落ち着いていて威厳がある。
「ルーアン市長のダルモア氏です」
「市長さん？」
「はい。お若いほうの方は、ギルバートさんといったかしら」
「詳しいのね」
エステルは感心してしまった。市長の名前ならば知っていても不思議はないが、秘書の名前まで憶えているなんて。
「王立学園の卒業生の方なんです。すごく優秀な成績を残した方だったとか」

「あ、なるほど」
そういう事情があるなら詳しいわけもわかる。
市長のダルモアが、三人を順番にじろりと睨みつけてから、「ルーアンは自由と伝統を誇る街だ。おまえたちの普段の行動をとやかくは言わんが、旅行客に迷惑をかけるというのなら話は別だぞ?」と言った。
「う、うるせえや。この貴族崩れの金満市長が」
「おまえたち、無礼にもほどがある!」
秘書が声を張り上げた。
一触即発。
だが、不良の三人組は、エステルとヨシュアが遊撃士であることに気付くと、一転して態度を変えたのだ。何かこそこそと三人で言葉を交わし合うと、思い切りありがちな捨て台詞を吐いて、倉庫街のほうへと去っていった。
市長がエステルたちに謝ってきた。
エステルとヨシュアも慌てて挨拶を返す。名乗ると、ダルモア市長は「なるほど」と大きく頷いた。
「そういえば遊撃士支部の受付の……ジャン君だったか。彼が有望な新人がくるとか言っていたが。君たちのことだったか」

「そんな有望だなんて……」
「しばらくこちらの地方にお世話になります」
「助かるよ。今、ルーアンは色々と大変な時期でね……。ところで、そちらのお嬢さんは遊撃士ではなく、王立学園の生徒のようだが?」
「クローゼ・リンツと申します。お初にお目にかかります」
市長に向かって頭を下げながら、クローゼが自己紹介をした。
「ほう、そうか。コリンズ学園長とは親しくさせてもらっている。そういえば、ギルバート君も王立学園の卒業生だったね」
「はい。クローゼ君……だったか。君の噂は色々と聞いているよ。現生徒会長のジル君と首席を争っているそうだね。優秀な後輩がいて、僕も卒業生として鼻が高い」
「そんな……」
「しゅ、首席……って、一番ってことよね? クローゼ、すごい!」
「エステルさん、そんな」
クローゼは謙遜したが、市長はそれを聞いて感心していた。
「うむ、素晴らしいな。今度の学園祭は私も非常に楽しみにしている。頑張ってくれたまえ」
「は、はい!」
クローゼが恐縮した面持ちになり頭を下げた。

ダルモア市長はエステルたちに、困ったら遠慮なく相談してくれと言って、秘書ギルバートとその場を立ち去った。
「はあ。なんかやたらと貫禄のある人だったわねー」
「確かに。市長らしい市長、という感じだね」
「ダルモア家といえば、かつての大貴族の家柄ですから。貴族制が廃止されたとはいえ、いまだに上流階級の代表者とされている方です」
「ほえぇ。貴族とか、なんか住む世界が違うって感じ」
「でも、何事もなくてよかったです。あんな人たちに絡まれるなんて……。ごめんなさい。あぶない場所に案内してしまったみたいで」
「君が謝ることないよ」
「そうそう。ヨシュアの言うとおり。悪いのはあいつらだもん！」
もう少しクローゼの案内で街を見て回りたかったが、無理をせず、エステルたちは遊撃士協会の支部へと戻った。
受付のジャンがカウンターに戻ってきていた。ボースの支部から事前に連絡が入っていたらしく、転属手続きも問題なく進む。
建物を出たときには西の空が赤くなっていた。
「もうすぐ橋が上がる時間ですよ」
忘れていたことをクローゼが思い出させてくれた。
急いで橋の袂へと向かう。
「あ、ほら！　橋が上がっていきます！」
柔らかくなった日の光を浴びて、白い石造りの巨大な橋が真ん中で割れ、手前と向こう岸でゆっくりと持ちあがってゆく。見上げるほどの高さにまで跳ね上がった。片方だけで五十アージュはあるはずだから、まるで巨大な塔のように見えてしまう。暮れなずむ藍色の空に向かって聳えていた。
「ふわぁ、すごぉい」
「これは……確かに壮観だね」
「ルーアンの街に訪れる人には、ぜひ見てもらいたいんです。ところでエステルさんたちは今夜の宿はどうされるんですか？」
《ラングランド大橋》が跳ね上がるのを見た後で、クローゼが問いかけてきた。
支部の宿泊施設を借りる手もあった。だが、エステルとしては、最初くらいは優雅にホテルにでも泊まりたいと思っていた。そのことを口にすると、クローゼが、「でしたら、急いだほうがいいかも。今は観光シーズンですから、あっという間に一杯になってしまいますよ」と教えてくれた。
「そうか……。すぐに行ってみたほうがよさそうだね」

クローゼに案内してもらって、街に入ってすぐの処にあるホテルに辿りついた。
《ホテル・ブランシェ》。
看板を見ると、そう書いてあった。
部屋は既に一杯だったが、最上階にキャンセルが出て空いていた。遊撃士さんたちにはお世話になっているからサービスしますよ、とまで言われて、エステルとヨシュアはその部屋に決めた。なんと、ボートを貸してくれて釣りもできるらしい。
「よかったですね、エステルさん、ヨシュアさん」
「うん。案内してくれてありがとう」
「ふふ。大したことは……。では、そろそろ学園に戻りますね」
「もう日が落ちちゃうけど、大丈夫？」
学園の近くに魔獣が出ると先ほど言っていた。エステルは心配になってしまう。
「大丈夫です。学園に戻る人たちと一緒にさせてもらいますから。そうだ、エステルさんたちはしばらくルーアンにいらっしゃるんですよね？　よかったら今週末にある学園祭にいらっしゃいませんか？」
クローゼが別れ際に言った。
「学園祭？」
「名前からすると、学園の行事か何かかな？」

「はい。生徒たちが自主的に開くお祭りです。伝統行事なんですよ」
「お祭り！　あたし、そーいうの好きかも！　行きたい！　というか、むしろ参加したいくらい！」
つい、その気になったら、ヨシュアにたしなめられてしまった。
「こらこら。僕たちはルーアン支部で遊撃士の仕事をしなくちゃ。さっきもジャンさんに頑張りますって言ったばかりじゃないか」
「あ、うん……うーん。惜しい。うう、せっかくのお祭りなのにー」
「まあ、学園祭の当日だけなら、いい息抜きにもなると思うし……。でも、それまでしっかり仕事しようね」
「ふあぁい」
エステルたちのやりとりを見ていたクローゼがくすくすと笑っていた。
再会を約束して別れる。
たくさんの新たな出会いのあった一日だった。なかには不良たち三人組みたいにあまり出会いたくない輩もいたが、それでも気持ちいい人と出会えたほうが多かったとエステルは思うのだった。
孤児院のテレサ院長、子どもたち――イタズラ小僧のクラムをそこに加えてもいい、王立学園の生徒であるクローゼ。ルーアン支部で出会ったカルナさんや受付のジャンさんも、親切に

エステルたちを迎え入れてくれた……。
忙しい一日だったとエステルは思う。やっと一息つけると、最上階の部屋に辿りついて、荷物を下ろそうとしたときだった。
まさか、そこからその日の出会いの中でも最悪の出会いが待っていようとは――。
さすがにエステルも予想していなかった。

† † †

《ホテル・ブランシュ》の最上階のその部屋には、海の見えるバルコニーが付いていた。
「すごいな……。こんなのまであるんだ」
ヨシュアが言った。
バルコニー越しに見える海は、夕日を照り返して光っている。水平線ギリギリにある太陽は、いつもよりも大きく赤く見えた。波止場には荷卸しに使う滑車のついた塔がいくつも立ち並び、小さく見える人影が、ちょろちょろとまだ行き交っている。
「すっごく良い眺めよね」
「遠くまで見えるね。定期船かな……ほら、こっちに向かってきている」
光の反射でよくは見えないが、確かにヨシュアの言うとおり、遠く西の方角から豆粒のよう

に小さな船が近づいてきていた。相変わらずヨシュアは目がいい。
「父さんも一緒だったらな」
思わず言っていた。
「そうだね。あの人ときたら、どこで何をしているんだろう」
エステルとヨシュアは、お互いしばらく黙ったまま暮れなずむ街並みを見ていた。
空が徐々に青さを増してゆく。
東の地平線近く、藍色に染まった天幕に星がきらめき始めた。
「エステル、そろそろ部屋に戻ろ――」
言い掛けて、ヨシュアが口を閉ざす。
『ほほう……なかなか良い部屋ではないか』
聞いたことのない声が、部屋の中から聞こえたのだ。
エステルとヨシュアは視線を交わし合う。そのまま声を出さずに、バルコニーから部屋の中へと引き返した。
エステルたちが借りた部屋に侵入者がいた。
「なんでここに……」
「しっ。エステル、ちょっと様子を見てみよう」
カーテンの陰に隠れて窺った。

侵入者は二名。
ひとりは背の低い中年の男性で、今からパーティにでも行くのかと思うような、やたらと派手な服を着込んでいた。髪型も奇抜で、眉の上で水平にぱっつんと切り揃えていて、まるでキノコのようだ。さらに鼻の下と顎にちょっぴりの髭を生やしていた。悪いとは思いつつ、見つめているとエステルは笑ってしまいそうになる。
「な、なに、あれ……」
「さあ……僕に訊かれても……」
その男は部屋の中をあれこれ見廻しては、満足そうに頷いている。
「うむ。気に入った。滞在中はこの部屋を使うことにする」
「閣下、お待ちくださいませ」
男を止めたのは、もうひとりの侵入者だ。ひょろりとした体格で、細縁の眼鏡を掛けた老人だった。
「このお部屋は利用客がいるとのこと。予定通り、市長殿の屋敷に滞在なさったほうが……」
「黙れ、フィリップ！　あそこは海が見えんではないか。その点、ここは海沿いだ。景色もいいし、ほれ、窓から入ってくる潮風も……む？」
潮風がカーテンをふわりと膨らませ、ゆっくりと元の位置に戻る。
ようやく男はエステルとヨシュアに気付いたようだ。とうにエステルたちはカーテンの陰か

ら出ていたのだが……。
「なんだ、お前たちは！」
声を荒げたと思ったら、急に怯えたような顔になる。
「もしや、賊か！　私の命を狙いに！」
「なに、トチ狂ったこと言っているのよ。オジサンたちこそ何者？　勝手に人の部屋に入ってきたりして」
「オ、オジサン呼ばわりするでない！　まあ、ちょうどいい。お前たちがこの部屋の利用客だな。この部屋は私が接収させてもらう。というわけで、さっさと出ていくように」
「はあ？　言っていることが全然判らないんですけど」
「事情をお伺いしたいですね」
ヨシュアが静かに言った。
ということは怒っているということだ。
だが、閣下と呼ばれた男は、ヨシュアの放つ静かな怒りの波動に気付かなかったようだ。
それどころか、男はやおら自分の名前を声高に名乗り始めた。
「私の名前は、デュナン・フォン・アウスレーゼ！　アリシア女王の甥にして、公爵位を授けられし者である！　次期、国王に定められた者なるぞ！」
「…………………」

「…………………………」
　エステルとヨシュアは沈黙し、それから笑い出した。
「……ぷっ。あははは」
「……はは」
「な、何がおかしいのだ！」
「だ、だって～。よりにもよって、女王様の甥ですって！」
「エステル、そんなに笑ったら悪いよ。こ、この人も、場を和ませようと思ったのかもしれないし」
「お、お、おまえら……！」
　怒りに言葉を詰まらせた男の代わりに、黒の、よく見れば執事服らしきものを着こんだ老人が、細い縁の眼鏡の奥から申し訳なさそうな瞳を覗かせながら言う。
「誠に失礼ながら、閣下の仰ることは嘘偽りや冗談ではなく真実です」
「あははは……は？」
「え……？」
「真実です」
　老人が繰り返した。
　フィリップと名乗ったその老人は、目の前の派手な服を着た男が、正真正銘の女王陛下の甥

だと主張し、名誉に賭けて保証するとまで言うのだった。
（えええええ!?　信じられない！）
　エステルの内心は信じ切れていなかったけれど、執事のフィリップの言葉には真実の響きがあった。それが感じられてしまう。
　とはいえ、王族だから部屋を譲れ、などといきなり言われて納得できるものではない。
　エステルは理不尽なことが好きではなかった。反論しようとしたが、フィリップがエステルたちを部屋の片隅へ呼び、囁いてくる。済まないが公爵のために部屋を譲ってくれないだろうか、と頭を下げてきた。
　人のよさそうな老執事を困らせるのも本意ではなかったのでエステルたちは折れた。
「まあ、あたしたちには、ちょっと豪華すぎる部屋だったし」
「そうだね」
　ヨシュアが公爵に向かって言う。
「お騒がせしました。部屋は公爵閣下にお譲りします」
「そうかそうか！　わはは、最初からそう言えばいいのだ」
　いっぺんで上機嫌になった。
　髭を撫でつけながら、偉そうにしている公爵閣下を見て、エステルは何とも言えない疲れを感じてしまう。

（まったく、せっかく良い気分だったのになぁ）

　悪いことは重なるもので、フロントに代わりの部屋を問い合わせたところ、ホテルの空きは埋まってしまい既に無くなっていた。

　空は夕焼けもとうに消えて、すっかり夜になっている。

　もう、ルーアンの街を歩き回って新たな宿を探す余裕もなさそうだ。このままでは遊撃士の支部に泊めてもらうしかない。公爵の理不尽な要求を受け入れたのが運の尽きだったのかもしれなかった。

「困っているみたいじゃねえか」

　背中から掛けられた声に振り返った。

「よう。空賊アジトで会って以来だな」

　よれよれのネクタイを首に巻いた男が、にっと笑みを浮かべながら言った。

「ナイアル⁉」

　男は、リベール通信社の記者、ナイアル・バーンズだったのだ。

「意外な場所で会いますね」

「そりゃこっちの台詞だぜ。で、どうしたよ？」

　ナイアルに問われて、エステルたちは、自分たちに降りかかった災難について語った。

　聞いた途端にナイアルは笑いだした。だが、ひとしきり笑った後で、ナイアルはそれなら俺

の部屋に泊めてやると言ってくれたのだ。

　さっそくホテルのフロントと交渉し、了承してもらう。

　ナイアルの借りていた部屋は、ホテルの地下部分に当たる部屋で、さすがに眺めの美しさなど望むべくもなかった。とはいえ、エステルたち遊撃士にとっては、荒野で野宿もあたりまえの日常である。雨風（あめかぜ）をしのげる屋根があり、硬い土の代わりに柔らかいベッドがあるだけでありがたい。

「で、お前さんたち、晩メシはまだなんじゃねえか？」

「あ、うん。さっきまで街の見物をしていたし。まだだけど」

「奢ってやるから付き合えよ」

「ほぇ。どうしたの⁉」

「気前がいいですね」

「おまえさんたちには世話になったからな。空賊逮捕のスクープじゃ、ボーナスまで出たんだ。ちっとくらいは返してやらねえと」

「やった！」

「そういうことなら……ご馳走になります」

「アゼリア湾のうまい魚貝をたっぷり味わえる店に連れてってやる」

　そう言うナイアルに連れられていった店の食事は確かに美味しくて、ホテルの最上階を理不

尽に譲らされたことなど忘れてしまえそうだった。最後には幸せな気分でベッドに潜り込む。
（結局……悪くない一日だったのかも！）
エステルは満足して眠ったのだ。
明くる日。
ナイアルに礼を言った後で、エステルたちは遊撃士協会の支部へと向かった。ルーアン所属の遊撃士として、新しい仕事が待っている。旅の疲れも取れ、勇んで扉をくぐったエステルとヨシュアを、支部の受付であるジャンがやや慌てた顔で出迎えた。
事件が起こったので調べて欲しい、という。
「どうしたの？　何が起こったの？」
あたって欲しくない嫌な予感ほどあたるものだ。
ジャンの報告を聞いていたエステルとヨシュアの表情が凍りついた。
マノリアの海岸沿いにあるマーシア孤児院が、火事にあって全焼した。
テレサ院長と子どもたちの安否も確認されていない。
耳を疑うニュースだった。

第十幕　《レイヴン》

鼻を突いたのは焦げた木の不快な匂いだった。
「ひどい……」
エステルは焼け跡を前にして呆然としてしまう。
かつてマーシア孤児院だったものは、もはや建物の形を留めていなかった。
焼け落ちて柱だけになっており、地面から黒い棒と化してまばらに生えている。
足下には、床やら壁やらの燃え滓が散らばっていた。一歩進むたびに、ぱきりと音を立てて灰となって崩れる。椅子ひとつテーブルひとつ元の姿で残っているものはなく、かつての幸せな空間の記憶は、根こそぎ奪われてしまっていた。
まるで廃墟だ。
焼け跡の始末をしていた青年のひとりが、エステルたちに近寄ってきた。
「ひょっとして君たち、遊撃士協会から来たのかい？」
「う、うん……」
「みなさんはどこから？」
「マノリアだよ。瓦礫の片づけをしているんだ」
昨日の夜中。天を焦がして燃えあがる炎は、ここから街道を西に歩いた先のマノリア村から

も見えたという。慌てて消火に駆けつけたものの、古い木造の建物は思った以上に火の回りが早く、為すすべがなかった。
「あの――」
口にするのをためらうひとこと。だが、訊かねばならない。
「院長先生と……子どもたちは？」
「ああ――全員無事だよ」
エステルの全身からそのひとことを聞いた途端に力が抜けた。
「っ！　よ……よかったぁ！」
「マノリアの宿屋で休んでもらっている。これだけの火事のわりには、大したケガはなかったそうだぜ」
安堵の息を吐いてしまう。
「よ、よかったね、ヨシュア！」
「うん、不幸中の幸いだね」
「じゃあ、さっそくお見舞いに――」
「残念だけど、エステル。それはもうちょっと待って」
「えっ」
びっくりした。

ヨシュアを見ると、難しい顔をして焼け跡を睨んでいる。
「ど、どうしたの？」
「ヘンだなって思ってさ……」
「……ヘン？」
「見てごらん。このあたりは火元になりそうなものもない。山火事が起きて飛び火した、というわけでもないし。しかも、火事が起きたのは夜中だ」
「そうか。子どもたちは寝ちゃってるし、あの院長先生が火の不始末なんて考えにくいもんね」
エステルの言葉にヨシュアも頷く。つまりこれは不審火ということだ。
「わかった。あたしも遊撃士だもん。何があったか突きとめないと！」
エステルとヨシュアは、焼け跡の中をあれこれ探し回った。最初はとくに何かが見つかるという当てがあったわけではない。だが――。
火の勢いが激しかったと思われる処が扉の外側であったり、油の匂いが残っていたりと、おかしな所が調べているうちに少しずつ見えてくる。院長先生の大切にしていたハーブ畑にも踏みにじられた跡が残っていた。
「誰かが夜中に畑だと気付かず踏み込んだ証拠だろうね」
「……誰かって？」
「そいつらが、油を撒いて火を点けたんだと思う」

「じゃあ、……やっぱり放火なの？」
恐ろしい結論だが、もはやそうとしか考えられない。
「たぶん……」
「それ……本当ですか……？」
背中から問いかけてきた声。呆然と焼け跡を見つめる制服姿の少女の姿があった。
「クローゼさん！」
「来ていたのか……」
「どうして……こんな……酷いことができるんですか……？」
静かな声。だが、クローゼは怒りを抑えているのだ。よく見れば細い肩は震え、両の手はきつく握りしめられて白くなっている。
エステルは、クローゼに近づくと両の腕を彼女の身体に回して優しく力を込めた。
「ひどすぎるよね……」
「エステルさん」
「でも、安心して。先生と子どもたちは無事だって。だから――大丈夫。なにもかもなくなったわけじゃない」
こわばっていたクローゼの身体から力が抜ける。
「ありがとう。すこし落ち着きました」

「うん」
「僕たちはこれからお見舞いに行くところなんだけど、よかったら一緒に」
ヨシュアが気を利かせて誘い、クローゼが頷いた。
マノリアの村まで歩き、教えられた宿屋に行くと、院長先生と子どもたちがいた。
子どもたちはみなどこか不安そうな顔をしていたが、クローゼの顔を見ると、ほっとしたように笑顔になった。ほんとうにクローゼは子どもたちに好かれているようだ。
「クローゼ……。それに、エステルさん、ヨシュアさん」
テレサ院長がベッドから身体を起こした。
「わざわざここまで？」
「はい……ギルドに連絡があったから」
「調査に来たついでにお見舞いに寄らせて頂きました」
「まあ。調査……」
「何かわかったこと、あんの？」
テレサ院長を心配そうに見つめていたクラムが、そう訊いてきたのだが、エステルは答えるのに躊躇してしまう。あまり子どもたちに聞かせたくない話だからだ。
「みんな。お腹空いてない？　甘いものご馳走してあげようか？」
クローゼがそう切りだして、子どもたちを引きつれて宿の食堂へと連れて行ってくれた。

廊下を遠ざかっていくにぎやかな子どもたちの声が聞こえる。
「ふふ、良い子に恵まれて私は本当に幸せ者です……」
テレサ院長が微笑む。
「あの、お加減はよろしいんですか？」
「どうか、お気遣いなさらないで。ケガなどは特にしておりませんし。ただ、もうこの歳ですから、さすがに身体のほうがびっくりしてしまって寝込んでしまっただけですわ」
それはそれで大変なのではあるまいかとエステルは思うのだが――。
「調査に来たとおっしゃっていましたね。何なりと訊いてくださいな」
気丈にも、テレサ院長はそう言ったのだった。



月刊 FALCOM MAGAZINE Vol.115

発行人	田中一寿
発行協力	日本ファルコム株式会社
編集	小渕智幸 河野崇
デザイン・DTP	株式会社 ACQUA
表紙ロゴデザイン	荻窪裕司（デザインクロッパー）
発行	株式会社フィールドワイ 〒 101-0062 東京都千代田区神田駿河台3-1-9　日光ビル3F TEL 03-5282-2211（代表） http://www.field-y.co.jp/